

伝吉田寺跡

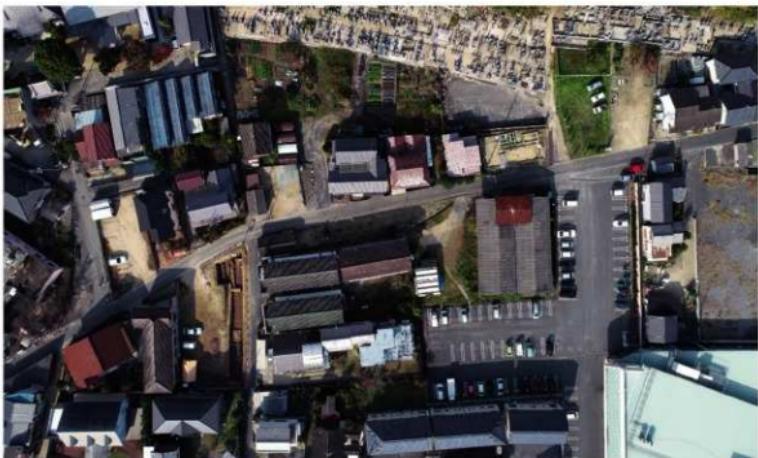
平成30(2018)年度調査に関する報告

平成31年

府中市教育委員会



備後国府跡(府中市街地:元町付近)空撮写真 2001年撮影



備後国府跡(伝吉田寺・金龍寺東地区)空撮写真 2018年撮影



伝吉田寺跡空撮写真(南から) 2018年撮影



伝吉田寺跡(1803T)調査区全体写真



伝吉田寺跡(1803T)SD018-026, SS025(南から)



伝吉田寺跡(1803T)SB020, SB029(北から)



伝吉田寺跡(1803T)SB029, SD030(北から)



伝吉田寺跡(1803T)出土 重圈文系鬼瓦

伝吉田寺跡

平成30(2018)年度調査に関する報告



序

広島県府中市は、広島県東部を流れる芦田川の中流域にあり、現在は「ものづくり」産業が盛んな都市として知られています。そして、歴史をひもとけば、市名の「府中」が示すように、奈良・平安時代に備後國の国府が置かれた地でした。

府中市域での国府を探索する発掘調査は、広島県教育委員会によって昭和57(1982)年度に開始され、府中市教育委員会も平成2(1990)年度から調査に取り組み、現在に至るまで継続して調査を行っています。調査を積み重ねることで、徐々に国府が置かれた時代の様相が明らかになり、国庁跡など国府の中心部も推定できつつあります。

平成28(2016)年度には、これまでの30年以上に及ぶ調査の成果を総括的にまとめた報告書「備後國府関連遺跡1」を刊行いたしました。この間、多くの研究者のご協力や地元住民のご理解を得て、平成28(2016)年10月3日に「ツジ地区」「金龍寺東地区」の2地区が国史跡として指定され、府中市初の史跡が誕生しました。そして、総括報告書では、伝吉田寺跡が国府に関わる重要な宗教施設であったことにも触れています。

伝吉田寺跡の発掘調査は古く、昭和17(1942)年を端緒としています。昭和18(1943)年には、伝吉田寺跡の一部が広島県史跡となり、昭和42(1967)年には、伝吉田寺跡出土遺物が府中市指定重要文化財に指定されています。昭和43(1968)年の調査では、塔基壇の規模などが明らかになり、法起寺式の伽藍配置が推定されました。その後も少しづつ成果を積み重ね、平成30(2018)年度の調査においても伝吉田寺跡の一端を明らかにすことができました。

府中市街地の地下に眠る備後國府跡は、府中市の原点ともいえる遺跡です。私たちは、継続した調査によって府中の黎明を解明していくとともに、この大切な文化財を未来の子どもたちに引き継ぐために、市民の皆さんと共にその保護と活用を考えていきたいと思っております。

本書が文化財の理解と保護のために活用され、府中市の歴史を語る資料として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご協力・ご指導いただいた関係者の皆さんに、厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月

府中市教育委員会
教育長 平谷 昭彦

例　　言

- 1 本書は、府中市教育委員会が平成30(2018)年度に、国庫補助事業として実施した伝吉田寺跡の発掘調査の概要報告である。
- 2 調査は、遺跡の現状変更などに伴う埋蔵文化財緊急調査事業として、府中市教育委員会総務課を主務課として実施した。
- 3 府中市文化財保護審議委員会及び同備後国府跡調査研究指導委員会の指導のもとに、発掘調査(現地作業から報告書作成まで)を実施した。また、国庫補助事業の実施にあたっては、文化庁文化財部記念物課(平成30年10月以降は文化財第二課)および広島県教育委員会文化財課と連絡をとり指導を仰いだ。
- 4 調査についての記述は、現段階での認識であり、今後、調査の進展に伴い変更されるべきものである。将来においては、当該遺跡にかかわる最新報告の記述を優先されたい。
- 5 発掘調査は磯久容子が担当し、本書の執筆・編集も磯久が行った。
- 6 本書で使用した遺構の個別番号については、既往の調査で確認された遺構も含めて、001から通しの番号を新たに付けたものである。
- 7 遺物の実測および拓本、掲載図面の作成にあたっては、石口和男、道田賢志、江草宣友、松尾雅子、安原照美、山本奈津子の協力を得た。遺物の写真撮影は山本が行った。遺物整理その他に、江草、松尾、安原、山本の協力を得た。
- 8 調査・報告書作成において援助・教示を頂いた方々は、第1章第2節に列記している。深く感謝申し上げます。
- 9 本報告書作成にかかわる整理作業その他は、平成30(2018)年度に実施した。本報告書に掲載した調査の記録類、出土遺物等は、すべて府中市教育委員会で保管している。
- 10 本書の図3に掲載した地形図は、国土地理院地形図「府中・新市」(1/25,000)を使用した。
- 11 本書に掲載した空撮写真は、株式会社ツシマエレクトリックが撮影したものである。
- 12 本書で用いる高度値は標高であり、方位は原則座標北を示す。挿図中の座標表示は、国土地調査法による世界測地系(平面直角座標系第III系)をもとに基準点を設け作成している。
- 13 調査成果の事実報告にかかわる部分の年次表記は、煩雑さを避けるため西暦で表記した。

【凡例】

1 本文中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。

SB: 建物 SD: 溝 SK: 土坑 SP: 柱穴 SS: 石列・礎石 SU: 瓦集中部 SX: 性格不明遺構

2 本文中の調査名称については次のとおりである。

a. 府中市埋蔵文化財調査団および府中市教育委員会による保存目的調査と個人住宅建設に伴う試掘確認および記録保存調査

調査年度とトレンチ番号の組み合わせ 例 1) 1990 年度 01T … 9001T

例 2) 2010 年度 02T … 1002T

b. 広島県教育委員会等による保存目的調査

調査次数とトレンチ番号の組み合わせ 例 1) 第 1 次 01T … 県 101T

例 2) 第 10 次 02T … 県 1002T

調査年度と遺跡名の組み合わせ 例 1) 伝吉田寺跡 … 県 67 吉田寺

c. 個人住宅建設以外の開発に伴う試掘確認および記録保存調査

調査年度と遺跡名称または事業内容の略称などの組み合わせ

例 1) 1988 年度砂山遺跡：都市計画道路建設 … 88 砂山街路

例 2) 2001 年度ホリノ河内遺跡：市道改良工事 … 01 ホリノ

3 本文中の報告書の略称は次のとおりである。

広島県教育委員会・広島県立埋蔵文化財センター・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター編
『備後国府跡』1983 ~ 1992 … 「県備国 1 ~ 10 次」

広島県教育委員会編『伝吉田寺跡発掘調査概報』1968 … 「県吉田寺 67」

府中市埋蔵文化財調査団・府中市教育委員会編

『備後国府跡』1989-1992・1993 … 「市備国 88-90・91」

府中市教育委員会編『府中市内遺跡』…「府市 1 ~ 18」

府中市教育委員会編『備後国府関連遺跡』…「備国総括 1」

4 本文中に記してある出土遺物量の単位について、一定量以上の出土量がある場合、単位を○箱といった収納箱(コンテナ)数でその概数を示す。収納箱の容量は、次のとおりとする。

コンテナ箱(小)：容量約 13 ℥ (34×54×7cm)

コンテナ箱(中)：容量約 18 ℥ (34×54×10cm)

5 図・図版の縮尺は、下記のようになっている。

〈図〉 遺構：全体図 1/200、遺構平面・立面・断面 1/50 ~ 1/80

遺物：1/3 ~ 1/6

〈図版〉遺物：約 1/3 ~ 1/6

6 本書で用いる高度値は標高であり、方位は国土座標北を示す。

7 本調査区内の全体的な土層番号は、各遺構等の説明文中においては、遺構内埋土の土層番号と区別するために〈 〉をつけている。

8 土層および遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」をもとに記述している。

- 9 遺物の器種名は一般名称に従うが、必要に応じ、～磁、～焼などの種別を付している。
- 10 遺物観察表の表記は、次のような基準で表記している。
- 器種………器種名は一般名称に従うが、必要に応じ、弥生土器、土師器、須恵器、～磁、～焼などの種別を付している。土師器と土師質土器とは明確に区別することが困難なため、便宜上すべて土師器と表現した。
- 法量………口径・底径などは、残存部分が1/2周以上のものについては実数値、1/2周以下のものについては復元推定値である。〈　〉は、現状の残存値を示す。蓋・高台付の器種については、底径の欄に天井径、高台径をそれぞれ記した。
- 部位………内面:(内)、外面:(外)、底部:(底)、天井部:(天)などと表現し、たとえば底部内面は(底内)のように組み合わせて用いる。全体的特徴を表すときは、部位の略号は省く。
- 調整技法……回転を利用してナデたものをヨコナデ、その他や不詳のものは～方向のナデ、ナデと表す。底部切離し技法のうち、底部中心近くまで深くヘラを入れて切り離したものへラ切りと表現する。不詳のものはヘラ切りに含める。
- 色調………表中では、内面を先に記し、「・」の後に外面を記した。両面が共通する場合は外面を省略した。
- 胎土………胎土に含まれる砂粒について、微砂:径0.5mm以下、細砂:径0.5～1mm、粗砂:径1～2mm、礫:径2mm以上をおおよその基準として分類する。表中では、細砂～礫の含有量を、わずかに含む:▽、少し含む:△、含む:○、多く含む:◎で示している。微砂については、細砂以上の砂粒を含む場合は省略し、含まない場合は、少し含む:精良、多く含む:やや精良と表す。砂粒をほとんど含まず、胎土がきめ細かいものを精緻と表現する。
- 表中の遺構・遺物番号は、本文中の番号と一致する。
- 11 時期の呼称は、一般的時代区分の名称を用いる。古代以降は、暫定的に奈良時代～平安時代中(10～11世紀)ごろまでを古代、それ以後、鎌倉時代までを古代末～中世前半、室町時代を中世後半とする。
- 12 本書において用いる「国衙」については、正方位を意識した官衙諸施設が展開する府中市元町を中心とした東西約1kmの範囲を国序(推定)とその周辺の曹司群、国司館を含めて使用している。
- 13 註釈は節毎にまとめ、各節の最後に記載している。

目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
第2節 調査組織.....	3
第2章 伝吉田寺跡の地理的・歴史的環境.....	4
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	5
第3節 備後国府における伝吉田寺跡の位置.....	8
第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果.....	12
第1節 調査の概要.....	12
第2節 層序.....	16
第3節 遺構について.....	19
第4節 遺物について.....	27
第5節 遺構の変遷.....	34
第4章 まとめ.....	36
報告書抄録	

図 目 次

第2章

図1 府中市位置図(縮尺1/3,000,000)	4
図2 旧国・郡区分(縮尺1/84,000)	4
図3 府中市街地周辺の遺跡分布図(縮尺1/50,000)	6
図4 元町周辺調査区及び備後国府跡地区配置図(縮尺1/7,500).....	9

第3章

図5 伝吉田寺地区・金龍寺東地区調査区配置図(縮尺1/1,000)	13
図6 主要遺構配置図(縮尺1/200)	15
図7 調査区土層図(縮尺1/60)	17
図8 SD018・SU019遺構・遺物実測図(縮尺1/80・1/6)	19
図9 SB020・SD021遺構実測図(縮尺1/60)	21
図10 SD021遺構・遺物実測図(縮尺1/60・1/6)	23
図11 SS025・SD026・SU027遺構実測図(縮尺1/80)	24
図12 SD026遺物実測図(縮尺1/3)	24
図13 SU028・SB029・SD030遺構実測図(縮尺1/60)	25
図14 遺物実測図①(6～8層)(縮尺1/3)	27
図15 遺物実測図②(4～5層)(縮尺1/3)	29

図16 遺物実測図③(軒瓦・鬼瓦)(縮尺1/4)	31
図17 遺物実測図④(丸瓦・平瓦)(縮尺1/6)	32
図18 主要遺構変遷図(縮尺1/400)	35
第4章	
図19 伝吉田寺跡主要古代遺構配置図(縮尺1/1,000)	36
図20 金龍寺所蔵出土仁王像	37
図21 備後国府系瓦の分布と古代山陽道の駅家(縮尺1/600,000)	38

表 目 次

第2章

表1 地区別調査地一覧表	10
表2 伝吉田寺跡調査一覧表	12
表3 伝吉田寺跡(1803T)遺構番号表	14
第3章	
表4 遺物観察表	33

図版目次

カラー図版1 備後国府跡(府中市街地:元町付近)空撮写真 2001年撮影
備後国府跡(伝吉田寺・金龍寺東地区)空撮写真 2018年撮影
カラー図版2 伝吉田寺跡空撮写真 2018年撮影
カラー図版3 伝吉田寺跡(1803T)遺構・重圓文系鬼瓦

図版1 伝吉田寺跡(1803T)調査前風景・遺構
図版2 伝吉田寺跡(1803T)遺構
図版3 伝吉田寺跡(1803T)遺構
図版4 伝吉田寺跡(1803T)遺構・遺物
図版5 伝吉田寺跡(1803T)遺物
図版6 伝吉田寺跡(1803T)遺物
図版7 伝吉田寺跡(1803T)遺物
図版8 伝吉田寺跡(1803T)遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 調査の目的

伝吉田寺跡は、府中市元町および府中町に所在する古代寺院で、創建時期は7世紀後半の白鳳期に遡ると想定される寺院跡である。一部が広島県史跡に指定されている。

調査場所は、府中市府中町字下才田237番1・237番16で、伝吉田寺跡の中門や南門の存在も想定される重要な地点であった。平成30(2018)年6月、既存建物が取り壊され不動産会社(株式会社ウェルホーム)に土地が売買されたことを受けて、所有者・関係者と協議し、所有者の埋蔵文化財に対する深い理解と協力が得られたことから、主要建物の遺構の保存を前提とした保存目的の緊急確認調査として実施した。調査主体は府中市教育委員会である。

2. 調査に至る経緯と経過

平成30(2018)年6月1日の午後、調査場所の前所有者から、建物取り壊し後の不動産売買を控えて「文化財等の有無」についての事前協議があった。これを受けて、教育委員会は、当地に重要遺跡の伝吉田寺跡が所在することを説明し、事前の発掘調査の実施および建物撤去工事の立会について承諾を得たが、翌日現地確認した時には撤去工事はすでに終了した状況であった。これらの経過について、府中市備後国府跡調査研究指導委員会(以下 指導委員会)の委員に説明して意見を仰ぎ、平成30(2018)年度の確認調査について伝吉田寺跡を調査する方針で調整することにした。そして、6月22日の指導委員会にて発掘調査方法や今後の取り扱いの注意点などについて指導を受けた。なかでも、所有者との協議については、伝吉田寺跡が古代寺院であるだけでなく備後国府にも関連する重要遺跡であることから、調査前の段階から調査で重要な遺構が確認された場合には遺跡の保存をお願いすることになる旨を説明して、理解をいただいておくように指導を受けた。

6月下旬、当地が現所有者(株式会社ウェルホーム)に売買され、6月末から7月初旬にかけて、新しい所有者と発掘調査および遺跡の保存についての協議を重ねた結果、敷地内の発掘調査について承諾を得て、梅雨明け後の7月下旬から9月までの予定で発掘調査を実施することになった。また、地下遺構の保存についてもご理解をいただき、分譲住宅の建設用地として購入した土地ではあるが、遺構に影響を及ぼす柱状改良や地盤改良は実施しないとの確約も得たため、遺跡の保存を目的とした確認調査として実施することにした。さらに、調査で重要な遺構が確認された場合には、現地保存について再度協議することにし、結果として、構想段階であった開発計画の実施設計や工期の設定などは当面行わないこととなった。

発掘調査は7月23日から開始した。猛暑で作業が遅れていたが、8月20日には指導委員会の現地指導を受け、調査区北で確認された礎石や根石状の石について礎石建物跡でよいとの見解を得た。そして、建物が西に広がるかどうかを確認するために調査区を拡張して調査することになった。

調査区の拡張は9月3日から実施した。さらに、所有者と協議し、猛暑による調査の遅れと調査区の拡張を理由に、調査期間を延長した。また、10月12日に指導委員会の西別府委員長と大橋

第1章 はじめに

委員の現地指導を受け、奈良時代に溯源るとみられる東西溝は区画に関わる溝の可能性が高く、伝吉田寺の南辺を示す重要な遺構の可能性があるとの指導を受け、翌日、広島県教育委員会文化財課（以下 広島県教委）に調査状況を説明し、10月19日に広島県教委の現地視察を受けた。その後、礎石建物跡の直下で柱痕跡がある柱穴が2ヵ所検出され、礎石建物の下層に奈良時代末頃の掘立柱建物跡が所在することが明らかになったことから、広島県教委と伝吉田寺跡の今後の取り扱いについて協議をすることになった。市民へ現地を公開する遺跡の現地説明会は10月21日に開催し、120名の参加を得た。広島県教委から文化庁に情報提供しながら、市教委は調査の進捗状況を所有者へ説明し、積極的な保存を視野に入れた協議をすすめることとなった。

その後、11月はじめには、積極的な保存のための備後国府跡の追加指定具申等について、広島県教委と協議した。所有者にも、現状について説明し、今後の方向性が決まるまでの期間、調査を延長することになった。

11月14日には指導委員会の佐藤副委員長と松下委員の現地指導を受け、11月18日には広島県教委と文化庁技官の現地指導を受けて、調査をすすめるとともに、保存のための協議も続けた。その結果、平成31（2019）年1月に追加指定の意見具申を行うこととなり、土地は市が買い上げる方針が決まった。

12月18日、所有者と再度協議し、指定と土地の買い上げについて同意をもらい、積極的な保存に向けて事業をすすめることになった。現地は、12月25日から埋め戻し、12月28日に現地調査を終了した。遺構は、真砂土を厚さ30cm程度入れて埋め戻すことで保護を図った。

3. 調査の方法と整理作業の経過

調査地は、伝吉田寺跡の中軸推定線の西に隣接する地点で、昭和42（1967）年度の広島県教委による調査で、中門基壇南辺の可能性がある石積が見つかったトレンチの西隣にあたる場所であった。そのため、中門の所在確認および伝吉田寺跡の塔や講堂といった主要建物の前面の状況を確認するため、敷地の東端に、幅3.5m、長さ約24mの調査区（1803T）を設定し、途中北端部を西側に3.5m程拡張して調査した。現代造成土や近世以降の堆積土は重機で除去し、それ以下は人力によって掘り下げた。なお、敷地面積が狭いことから、掘削した土砂は出来る限り他の場所へ搬出して対応した。調査期間は平成30（2018）年7月23日～12月28日、調査面積は約150m²である。現地調査は、調査員1名、作業員7名で実施し、進捗状況により図面作成等に教育委員会職員の協力を得た。

整理作業については、平成30（2018）年10月から現地作業と並行して行った。出土遺物はコンテナ箱（中）で約300箱である。遺構の時期決定に最低限必要な遺構内や下層の包含層の出土遺物を優先的に洗浄し、指標となる遺物や特徴的な遺物などを抽出して実測した。報告書刊行までに出土遺物の約7割の遺物洗浄が間に合わなかったため、本書作成後も整理作業をすすめ、新しく得られた成果については、次年度以降に刊行予定の「府中市内遺跡」等で報告する予定である。

第2節 調査組織

《事業主体》 広島県府中市

《事業執行体制》

〈調査主体者〉

府中市教育委員会 教育長 平谷昭彦

〈調査指導組織〉

府中市文化財保護審議委員会	委員長	門田亨
	副委員長	小田原昭嗣(埋蔵文化財担当)
	委員	石口薰 甲斐泰弘 高橋孝二 田中律子 田邊英男
府中市備後國府跡調査研究指導委員会	委員長	西別府元日(広島大学名誉教授)
	副委員長	佐藤昭嗣(元岡山商科大学経営学部教授)
	委員	大橋泰夫(鳥根大学法文学部教授) 坂井秀弥(奈良大学教授) 松下正司(比治山大学名誉教授) 三浦正幸(広島大学名誉教授)

〈指導・助言〉

文化庁記念物課(平成30年10月以降 文化財第二課)、広島県教育委員会文化財課

〈事務・調査組織〉

教育委員会事務局	教育部長	石川裕洋
	総務課長	大和庄二郎
	庶務係長	近藤陽子
	文化財係長	道田賢志
	文化財係 主任	磯久容子
	主任	石口和男

〈調査組織〉

調査担当 道田賢志、磯久容子、石口和男

調査作業員 坂本進、清田義和、高山恒男、武田智登士、中井義則、松原理夫、山田福治

調査・整理作業員 江草宣友、松尾雅子、安原照美、山本奈津子

〈地元協力者〉

(株)ウェルホーム、小川兼幸、(株)ツシマエレクトリック、金龍寺、高橋仏壇店、木村英博

〈調査指導・助言〉

安間拓巳、伊藤実、妹尾周三、谷重豊季、向田裕始、松本和彦、古野徳久、榎木敏太

第2章 伝吉田寺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

府中市は広島県南東部、旧国・郡の区分では備後国南部の葦田郡に属している。備後地域は、地理的には、東西方向は畿内地方と九州地方の中間に位置し、南北方向は山陰地方と四国地方に挟まれた立地にあり、各時期を通じて各方面から文化的影響を受け、地域独自の文化と混じりあい複雑な文化伝統を生み出している。なかでも府中市は、瀬戸内海に注ぐ備後南部最大の河川である芦田川の中下流域に位置し、古代には山陽道が貫いた備後地域の東西・南北の交差点ともいえる場所に立地し、情報や文物が集積し拡散した場所であったと考えられる。こうした背景のもとで、古代に山陽道が通り、国府が設置され、古代備後國の中核としての性格も持つようになったと考えられる。

伝吉田寺跡および備後國府跡が所在する府中市街地は、芦田川の河口から30km程度上流の概ね西から東へ流下する芦田川の北岸に形成された沖積平野上に位置し、亀ヶ岳（標高539m）をはじめ400～500mの山塊からのびる丘陵と、芦田川に囲まれた南北約2km、東西約5kmの平野部に広がっている。この芦田川は、三原市大和町の水源から瀬戸内海に注ぐ河口までは概ね東流しているが、府中市周辺においては、市街地の西南端付近で北東方向から南東方向へ大きく流れを変えてS字に東流しており、市街地の広がる平野部は芦田川の氾濫の影響を受けやすい場所であった。

伝吉田寺跡については、府中市街地北西の山寄せに位置している。北側に標高約70mの丘陵の崖がせまり、南側に平野部を望む、標高32～36mの緩やかに南へ傾斜する、平野部の微高地に立地している。芦田川からは約1km離れており、河川氾濫の影響を直接的には受けない場所であったと考えられる。

このように、伝吉田寺跡は、芦田川の氾濫といった自然災害を受けにくい場所で、北側に丘陵を背負い、南側に平野を望む好地を選んで創建されたと考えられる。

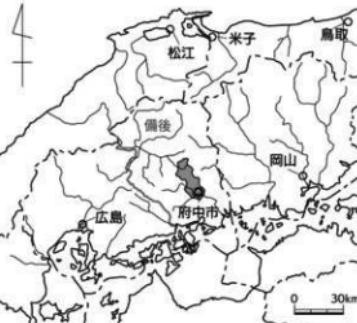


図1 府中市位置図（縮尺 1/3,000,000）



図2 旧国・郡区分（縮尺 1/84,000）

第2節 歴史的環境

伝吉田寺跡そして備後國府跡が所在する府中市街地の歴史的環境について述べる。

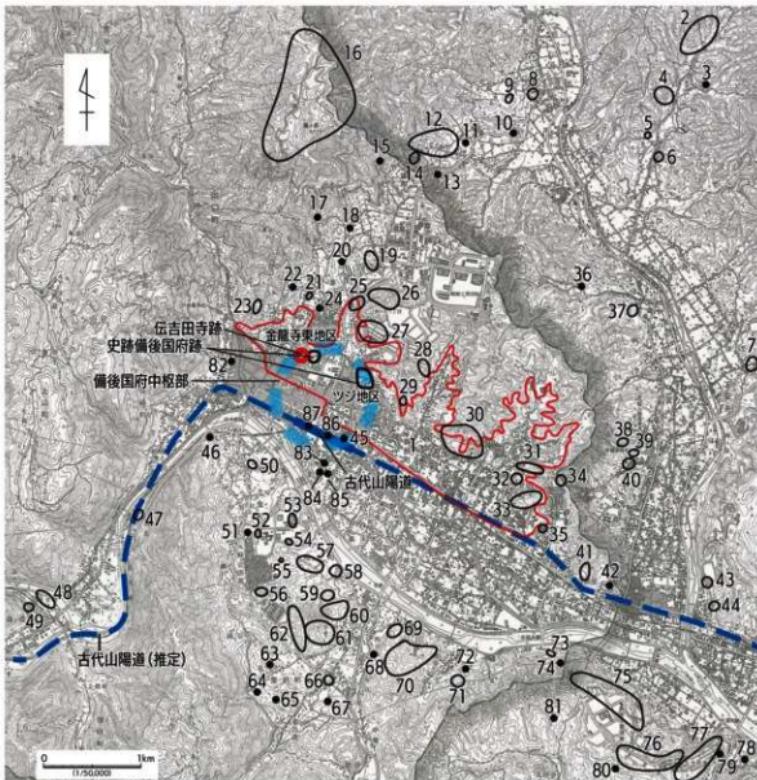
古代以前については、府中市街地において縄文時代後期あるいは弥生時代前期の土器が出土しているものの遺構は確認されていない。弥生時代中期以降には、平野部では、備後國府跡ツジ地区やホリノ河内地区（元町）、寺ノ前遺跡（鶴飼町）などで、弥生時代中期の住居跡が確認されているほか、山の神古墳（元町）や伊豆迫山遺跡（広谷町）など平野周辺の丘陵上に、墳墓・古墳が多く築かれている。伝吉田寺跡でも弥生時代中期後半の土器が出土している。

弥生・古墳時代の状況としては、前方後円墳や大規模な墳丘墓などは存在せず、ほとんどが小規模な墳墓・古墳であるのが特徴で、遺跡の分布状況から、個々に独立性の強い小集団が大きく統合されることなく、各時期を通じた地域集団として割拠していたとみられている。

古代に入ると、先述の地域集団が郷単位にまとめられ、それぞれ広瀬郷、葦田郷、驛家郷、都禰郷、葦浦郷などに編成されたとみられる。福山市駅家町近辺や神辺町に比べて、古墳時代後期までは大きな集団の存在が窺えなかったこの地域において、古墳時代終末期には、尾市1号古墳（福山市新市町）や打堀山B第2号古墳（鶴飼町）や東横木山A第4号古墳（鶴飼町）のような畿内系勢力とのつながりが想定される古墳が市街地およびその周辺部において築造され、古代には遺跡数が爆発的に増加する。

市街地における古代の遺跡としては、備後國府跡とその関連遺跡が広範囲に広がっている。出口町から広谷町までの東西約4km、南北約1kmにおよぶ市街地北半に、国府に関連するとみられる古代の遺跡が多く確認され、府中市街地遺跡群を形成しているほか、元町を中心とする直径約1.2kmの範囲に、伝吉田寺跡を含む、備後國府跡の各地区（ツジ地区・金龍寺東地区・砂山地区・ドウジョウ地区など：元町、鳥居地区：府川町）が面的に点在的に広がっている。また、鳥居地区では、近年、古代山陽道と国府中心部へ向かう道の分岐点が確認され、国府の入口ともいえる重要な地点であったことが明らかになり、さらに、古代山陽道の遺構が横井地区（府中町）、八反田地区（府川町）で確認され、古代の山陽道が国府の南側を直線的に東西に貫いていたことも明確になっている。

そのほか、市街地北の亀ヶ岳周辺に、古代山城の常城推定地（本山町・福山市新市町）や山林寺院の青目寺跡（本山町）が所在している。常城については、『続日本紀』の養老3（719）年の条に、「備後国安郡那の茨城、葦田郡の常城を停む」との記述があり、「常」の地名から、遺構は確認されていないが、福山市新市町常および府中市本山町亀ヶ岳（標高539m）の山頂付近にある七ツ池周辺一帯に存在したと推定されている。青目寺も、常城推定地と同じ七ツ池周辺一帯に所在しており、南北約1km、東西約0.7kmの範囲に、数地点に分かれ、尾根上や山腹斜面を削平して造成した平坦地に建物群が存在していたことが確認され、平安時代～南北朝時代にかけての遺物が出土している。伝吉田寺は、青目寺と同じ天台宗であった伝承があり、二つの寺院間で平地の寺と山の寺の関係が成り立つ可能性が高く関係性が深いとみられる。また、亀ヶ岳の山麓に所在する日吉神社（本山町）は、青目寺の開基と同じ弘仁4（813）年に勧請された伝承を持ち、神社遺構は未確認であるが、日吉神社遺跡（本山町）で11世紀後半～12世紀前半の遺物が出土している。



1 府中市街地遺跡群	2 神出古墳群	3 尾市 1号古墳	4 芦浦古墳群	5 屋敷荒神古墳	6 打部遺跡	7 大森道路
8 宮脇道路	9 矢畠田道路	10 天地道路	11 堀手古墳	12 樹原古墳群	13 向田古墳群	14 宇平道路
15 宝泉坊古墳	16 七ツ池古跡群 (青目寺・常城等)	17 竹田跡古墳	18 日吉神社遺跡	19 ヒランマル道路	20 助宗古墳	
21 石堀道路	22 黒金塚古墳	23 麓立山古墳	24 本山古墳	25 門田遺跡群・古墳群	26 松山古墳・中山遺跡群	
27 坊追道路群・山の神古墳群	28 果横木山古墳群	29 福輪塚古墳群	30 龍王山古墳群・打庭山遺跡群	31 伊豆追山遺跡		
32 平佐山遺跡	33 猿立山古墳	34 別所遺跡群	35 畑谷遺跡	36 真光寺古墳	37 久保田遺跡・古墳	38 輪鹿遺跡
39 吉備津神社裏山遺跡	40 多理比理神社裏遺跡	41 ウロウギ遺跡	42 御旅古墳	43 神谷川遺跡	44 神谷川南遺跡	
45 備後國府跡鳥居地区	46 野屋の木古墳	47 前原遺跡	48 法全坊遺跡群	49 下川辺遺跡	50 後間地遺跡	
51 巳の口山古墳	52 巳の口山道路	53 城山古墳群	54 森駆遺跡	55 黄番後山道路	56 千原道路・古墳	57 山手遺跡群
58 御門遺跡	59 大久保遺跡	60 茶臼山古墳群・平井古墳	61 平井遺跡群・池道跡	62 長迫遺跡群		
63 七郎古墳	64 名字向古墳	65 寺山遺跡	66 萩柄廻寺	67 ノーラ古墳	68 安江古墳	69 四日市遺跡
70 先陣古墳群・厚葉古墳	71 畑谷道路	72 畑谷古墳	73 向山道路	74 首塙古墳	75 城山道路群	
76 後池道路群	77 汐首遺跡群	78 畑崎山古墳	79 汐首古墳	80 曽根田白塚古墳	81 城谷古墳	82 芦高道路
83 田中道路	84 二宮神社道路	85 清手道路	86 古代山陽道八反田地区	87 古代山陽道横井地区		

図3 府中市街地周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)

市街地から離れた芦田川の右岸にも、伝吉田寺跡と同范同型の軒瓦が出土した栗柄廃寺(栗柄町)、重圓文軒瓦が出土した後開地遺跡(土生町)、駅家跡と推定される前原遺跡(父石町)などがあり、府中市街地および市街地周辺に官衙や寺院関係の遺跡が数多く存在している。

このように、古墳時代に有力な在地勢力が存在しなかったこの地域が、国府が設置される直前から急激に発展していく現象は特徴的である。葦田郡域である府中市街地は、早くから交通の要所であったが、備後國府成立以前には品治郡や安那郡に比べて顯著な勢力を持つ集団が存在していなかった。しかしながら、古墳時代終末期には、畿内系勢力とのつながりが想定される古墳が、市街地およびその周辺部において築造され、7世紀中頃～後半頃には古代山陽道が築造されるとともに、7世紀後半には市街地北の亀ヶ岳山塊周辺に古代山城常城が築城されたと考えられ、平野部には古代寺院伝吉田寺が創建されるなど、国府の設置と密接に関連するような施設が造営されている。

平安時代になると遺跡が増加し、官衙遺跡だけでなく一般集落と考えられる打堀山C遺跡(鵜飼町)などが、一段高い広めの谷状の緩傾斜地に所在している。一方、古代末から中世前半にかけて、田中遺跡・二宮神社遺跡(府川町)や、出口川沿いの芦高遺跡(目崎町)など、市街地南半の自然堤防上や一段低い低地にも遺跡が広がっている。このような状況から、国府が衰退していく古代末以降も中世前半までは府中のまちが拡大し、備後地域の中心として発展したことが窺える。

古代末から中世にかけては、当時の府中の様子がわかる史料は残っていないが、調査により、古代に大規模な建物が集中していた地域の周辺で、平安時代末から鎌倉時代にかけて小規模な建物が密集している状況が確認されている。平野部では、古代以降中世前半まではほとんどの遺跡が継続しているが、中世後半に衰退はじめ遺跡数が減少している。中世後半の遺跡としては、市街地遺跡群内では六地蔵遺跡(元町)、北方の丘陵端部にて寺院跡と推定される坊迫C遺跡(元町)などが確認されている。市街地南半では溝手遺跡(府川町)が存在し、現状の地割りから想定される方形区画を居館跡と推定する考えもある。また、平野部周辺の山塊に、八尾山城や幡立山城、鳶尾城、淵上城、茶臼山城などの中世山城が築かれている。

現況において、国府から移転したと考えられる政治的な活動拠点、守護所等の場所は、発掘調査で確認できていないが、14～15世紀の史料に「備後國符中」や「備後國府城」の記述が見られることから、鎌倉時代以降しばらくは、町が拡大を続け都市的な機能が維持されていたと考えられる。

近世の初め頃には平野部はほとんど農村化しているが、近世半ばをすぎた頃から「府中市村」が福山藩内の交易拠点の1つとして発展し、手工業産地として今日の産業都市の基礎が築かれる。明治期の地形図において、出口町から府中町にかけての旧市街地とは別に、備後國府ツジ地区が所在する元町の音無川周辺は、「町村」として正方位の地割を持って既に集落・宅地化している。備後國府の設置によってもたらされた計画的な地割や施設配置が中世から近世を経て、現在の地割りとして継承されたことがわかる。伝吉田寺跡周辺にも正方位地割がみられ、国府の計画的な施設配置が継承されたように、古代寺院伝吉田寺の施設配置が現在に継承されたものと考えられる。

また、式内社である甘南備神社(出口町)、備後國府跡ツジ地区北側の丘陵上に存在する總社(元町)、重要文化財の平安末～鎌倉の神像が祀られている南宮神社(栗柄町)、備後一宮吉備津神社(福山市新市町)など国府に間わりの深い神社が現在も所在し、備後國府があった時代の景観を留めている。

第3節 備後国府における伝吉田寺跡の位置

備後国府跡については、国府政庁（以降 国庁とする）の位置は明らかでないが、これまでの調査成果から、東はツジ地区から西は伝吉田寺に至る砂川（音無川）の両岸に広がる元町を中心とした東西約1kmの範囲に、官衙施設や寺院が所在したことが確認され、府中市元町を中心に、国府の諸施設および宗教施設が配置されて国府の中核域を形成していたことが明らかになっている。

平成28（2016）年刊行の「備國總括1」の報告書では、「ツジ地区」や「金龍寺東地区」をはじめ、国府の中核域を構成する遺跡について「地区」を設定した。元町及びその周囲において発掘調査を実施した地区及び調査地点・範囲は図4のとおりである^(註1)。

各地区の状況については、ツジ地区には国司館あるいは曹司が想定され、金龍寺東地区の苑池や瓦葺礎石建物は宗教施設もしくは饗宴施設や国司館の可能性があり、国庁は未確認ながら、国府進入路の先にある砂山地区に瓦葺の中核施設が所在する可能性も得られている。

そのほかの地区においても、国府が存在したことを色濃く示すような遺構や遺物が確認されている。ドウジョウ地区では、南北約80mの区画施設の存在が推定され、土塁を伴う区画溝から「所」「京」といった墨書き土器が出土している。大マヘ地区では、南北方向に延びる区画溝から10世紀後半の近江産縁軸陶器が多量に出土している。

また、長さ60cmを超える人形や国司に関わる「權介」の墨書き土器が出土し、祓所と推定されていた鳥居地区では、平成28（2016）年に古代山陽道および古代山陽道からほぼ真北に向かって延びる道路が確認され、古代山陽道の位置が確定するとともに、古代山陽道から国府中枢部へ向かう進入路の分岐点が明らかになった。さらに、横井地区や八反田地区でも、古代山陽道の側溝が確認され、ある時期の道路幅が約10mあったことも判明している。これらのことから、古代山陽道の北側に国衙の諸施設および寺院（宗教施設）が東西に広く展開し、都市的様相を呈していたことがより明確になっている。

その中で、備後国府中枢部の西端に位置する伝吉田寺跡（伝吉田寺地区）については、創建は7世紀後半に遡ると考えられるが、7世紀末から8世紀初頭には伽藍を備えた寺院となっており、国府設置以後には、国府に近接する寺院として、国府の重要な宗教施設として機能していたとみられている。東に隣接する金龍寺東地区の瓦葺礎石建物（SB001）は、宗教施設である可能性もあり、伝吉田寺との関係の究明などが課題となっている。しかしながら、「伝吉田寺地区」の寺域の範囲が定まっている状況ではないため、現時点においては別の地区として取り扱っている。

（註）

1 各地区的詳細は「備國總括1」に記述している。

なお、地区については、平成29（2017）年度段階における調査を総括したものであり、今後の調査の進展によって見直されるべきものである。

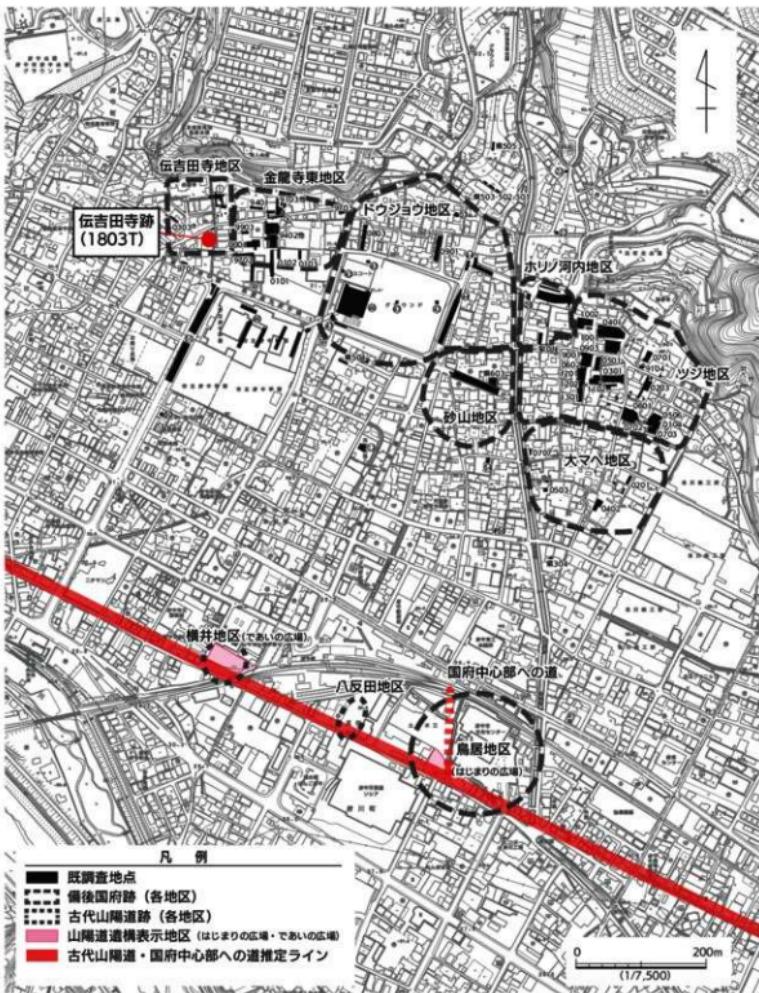


図4 元町周辺調査区及び備後国府跡地区配置図(縮尺 1/7,500)

第2章 伝吉田寺跡の地理的・歴史的環境

表1 地地区別調査地一覧表

遺跡	地区	調査区	調査年度	主要遺構・遺物	報告書	遺跡	地区	調査区	調査年度	主要遺構・遺物	報告書
伝 吉 田 寺 跡 伝 吉 田 寺 跡 金 龍 寺 東 遺 跡	県67吉田寺	1967	塔・講堂跡	「県古田67」		ツ ジ 遺 跡 ・元 町 東 遺 跡	県305T	1984	長舍建物SB007	「県御30次」	
	94吉田寺	1994	講堂跡	「府市3」			県306T	1984		「県御30次」	
	0303T	2003	満・土坑	「府市9」			県402T	1985		「県御30次」	
	1603T	2016	—	—			県605T	1987		「県御30次」	
	1704-1705T	2017	—	—			9001T	1990	長舍建物SB007	「県御30次」	
	1803T	2018	掘立柱建物跡など	本書			9802T	1998		「府市6」	
	9103T	1991	礎石建物SB001	「市御891」			9901T	1999	礎石建物SB055	「府市6」	
	9301T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0301T	2003	礎石建物SB055	「府市9」	
	9302T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0501T	2005	奈良三彩小瓶	「府市11」	
	9303T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0502T	2005		「府市11」	
	9304T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0601T	2006	東辺区画溝SD141	「府市12」	
	9305T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0602T	2006	中心的建物SB151	「府市12」	
	9306T	1993	礎石建物SB001	「府市1」			0702T	2007	東辺区画溝SD141	「府市13」	
	9401T	1994	礎石建物SB006	「府市2」			0708T	2007		「府市13」	
	9402T	1994		「府市2」			07ケアセン	2007		「府市13」	
	9403T	1994		「府市2」			0801T	2008		「府市14」	
	9501T	1995		「府市3」			0802T	2008		「府市14」	
	9502T	1995		「府市3」			0902T	2009		「府市15」	
	95金龍寺東下水	1995	礎石建物SB001	「府市3」			0903T	2009	北辺区画溝SD207	「府市15」	
	9702T	1997	区画溝SD048	「府市4」			0904T	2009		「府市15」	
	9703T	1997		「府市4」			1001T	2010	北辺区画溝SD207	「府市16」	
	9801T	1998		「府市5」			1003T	2010		「府市16」	
	9902T	1999		「府市6」			1102T	2011		「府市17」	
	9903T	1999		「府市6」			1103T	2011		「府市17」	
	0001T	2000	菟池遺構SG086	「府市7」			1104T	2011		「府市17」	
	0101T	2001		「府市8」			1105T	2011		「府市17」	
	0102T	2001		「府市8」			1201T	2012		「府市18」	
	0103T	2001		「府市8」			1202T	2012		「府市18」	
ド ウ ジ ヨ ウ 遺 跡	01-02Fウジヨウ	2001	丹猪土拂器	—			1301T	2013		「府市18」	
	二中試掘	~2002		—			県605T	1987	西辺区画溝SD106	「県御30次」	
	02Fウジヨウ試掘	2002		—			9104T	1991		「市御91」	
	03Pウジヨウ試掘	2003		—			0003T	2000		「市御91」	
	04Fウジヨウ試掘	2004		—			0104T	2001		「府市8」	
	04Pウジヨウ試掘	2004		—			0203T	2002	SB042-043	「府市8」	
	04Sウジヨウ試掘	2004		—			0505T	2005		「府市11」	
	05元町	2005		—			0506T	2005	南辺区画溝SD125	「府市11」	
	06元町	2006		—			0601T	2006	西辺区画溝SD106	「府市12」	
	06-2中G	2006		—			0603T	2006		「府市12」	
	07二中G	2007	東西区画溝?	—			0701T	2007		「府市13」	
	0803T	2008	東西区画溝	「府市14」			0702T	2007	区画溝南北側	「府市13」	
	0901T	2009		「府市15」			0703T	2007		「府市13」	
	県401T	1985		「県御40次」			1004T	2010		「府市16」	
	県403T	1985		「県御40次」			県301T	1984		「県御40次」	
	県404T	1985		「県御40次」			県302T	1984	礎石建物SB004	「県御40次」	
砂 山 遺 跡	県601T	1987		「県御40次」			県303T	1984		「県御40次」	
	県602T	1987		「県御40次」			0202T	2002		「府市8」	
	県603T	1987		「県御40次」			0401T	2004		「府市10」	
	県604T	1987		「県御40次」			1002T	2010	SB004, 紙印	「府市16」	
	88砂山街路	1988	蛇柱建物	「市御88」			県506T	1986		「県御40次」	
	0002T	2000		「府市7」			99上生元町1T	1999		—	
	0201T	2002		「府市8」			01ホリ1T	2001	橋脚、大溝	—	
	0402T	2004	南北区画溝	「府市10」			01ホリ2T	2001		—	
大 マ ヘ 遺 跡	0503T	2005		「府市11」			01ホリ3T	2001		—	
	0504T	2005		「府市11」			03ホリ4T	2003		—	
	06アセン試掘	2006		「府市13」			0709T	2007		「府市13」	
	0704T	2007		「府市13」			1101T	2011		「府市17」	
	0705T	2007		「府市13」			鳥居	鳥居	2015 1T～5T	道路遺構、 道路側溝	—
	0706T	2007		「府市13」			鳥居	鳥居	2016		—
	0707T	2007		「府市13」							
ホ リ ノ 河 内 遺 跡	ホリノ河内遺跡										

参考文献

府中市街地遺跡群

①備後國府跡・岡間連遺跡（金龍寺東遺跡・ツジ遺跡など）：

豊元国「備後國府考」「芸備地方史研究」5・6 1954

豊元国「府中市の沿革」「芸備文化」第3、4合併号 1958

豊元国「備後の國府について」「広島県文化財ニュース」No.27 1965

広島県教育委員会「備後國府跡－推定地にかかる第1次調査概報－」 1983

広島県立埋蔵文化財センター「備後國府跡－推定地にかかる第2～7次調査概報－」 1984～1989

府中市埋蔵文化財調査団「備後國府跡－都市計画道路建設にともなう発掘調査概報－」 1989

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「備後國府跡－推定地にかかる第8～10次調査概報－」 1990～1992

府中市教育委員会「備後國府跡－推定地にかかる 1990-1991年度調査概報－」 1991-1992

府中市教育委員会「府中市内遺跡1～18」府中市埋蔵文化財調査報告第6～12・15～19冊 1995～2018

府中市教育委員会「備後國府岡間連遺跡」府中市埋蔵文化財調査報告第27冊 2016

②伝吉田寺跡：

豊元国「吉田寺跡（現金龍寺）出土の古がわらに就いて（一）（二）」「備後史談」第19巻第3号・第8号 1943

広島県教育委員会「伝吉田寺跡発掘調査概報」 1968

③その他：

小都隆「芦田川水系における繩文時代遺跡の分布について」「考古論集」 1978

谷重豊季「備後國府付近の山陽道」「古代交通研究」第5号 古代交通研究会 1996

門田A遺跡・東横木山古墳群：

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「門田A遺跡・東横木山第1・4号古墳」 1999

坊追遺跡群：

府中市教育委員会「坊追遺跡群」府中市埋蔵文化財調査報告第13冊 2001

山ノ神遺跡群・古墳群：

府中市教育委員会「府中・山ノ神1号古墳発掘調査報告」 1983

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「山の神遺跡群・池ノ追遺跡群」 1998

龍王山古墳群・打坂山遺跡群：

府中市教育委員会「龍王山古墳群A支群・打坂山C遺跡」府中市埋蔵文化財調査報告第10冊 1999

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「打坂山遺跡群A・B地点」 1997

前原遺跡：

府中市教育委員会「前原遺跡」府中市埋蔵文化財調査報告第24冊 2011

七ツ池周辺遺跡群（常城・青目寺など）・青目寺岡間連遺跡：

豊元国「備後常城の調査」「奈良時代山城の研究」府高学報 1968

脇坂光彦「備後國府成立の考古学的背景」「芸備」第12集 芸備友の会 1982

広島県立府中高等学校生徒会地歴部「青目寺の調査報告」 1968

高橋孝二「平安後期の本山の様相」「もとやま」第二十一号 本山村郷土史会 1993

府中市教育委員会「府中市内遺跡8」府中市埋蔵文化財調査報告第16冊 2004

土井基司「最近の調査から見た青目寺跡」「もとやま」第二十五号 本山村郷土史会 1997

本山村郷土史会「もとやま」の各号に青目寺岡間連の論考・資料紹介が多く掲載されている。

日吉神社遺跡：

府中市教育委員会「府中市文化財紀要2」府中市文化財紀要第2冊 2014

栗柄庵寺：

府中市教育委員会「府中市内遺跡15」府中市埋蔵文化財調査報告第23冊 2011

溝手遺跡・田中遺跡・二宮神社遺跡：

谷重豊季「芦田郡府川村所在の『古城』について」「芸備」第28集 芸備友の会 1998

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

第1節 調査の概要

1. 既往の調査

伝吉田寺跡は、府中市元町に所在する紫雲山金龍寺の境内およびその周辺(府中市元町・府中町)に広がる寺跡である。古瓦の出土地として古くから知られた寺跡で、地名^(註1)をとり、町庵寺や元町庵寺とも呼称されてきた。伝吉田寺という名称について、近世地誌の金龍寺の項に「当山号始称蓮池山吉田寺、近曾今の山号に改む。昔は天台宗の大刹にありし…」(『西備名区』文化元(1804)年)や、「コノ寺モト吉田寺ト云天台ノ大刹ナリ、傍近ノ田トリ出シトテ、今金剛力士ノ朽腐セル一体を残ス、旧物ナルヘシ、[中略] 吉田ハ葦田ノ略ナリト云」(『福山志料』文化6(1809)年)という記述などが基になっているとみられ、郡名を冠する寺院とも考えられている。また、金龍寺本堂前の塔心礎とされる礎石や金龍寺が所蔵している仁王像に関する出土記述もあることから、江戸時代にはすでに遺構や遺物の一部は知られていたとみられる。

最も古い発掘調査は、昭和17(1942)年、当時広島県立府中高等学校教諭であった豊元国によって実施され、礎石の検出とともに、藤原宮式や川原寺式の軒丸瓦、唐草文の軒平瓦が出土し、法起寺式の伽藍配置が推定され、昭和18(1943)年に広島県史跡に指定されている。

その後、昭和43(1968)年2月に、指定地内の開発に伴う緊急対応として、広島県教委と広島大学による伝吉田寺跡の発掘調査(県67吉田寺)が行われた結果、塔跡と推定される一辻14.5mの乱石積基壇を確認し、講堂跡と推定される石列等が確認された。そして、中門跡や東側回廊、南門の推定位置にトレンチを設定し、従前の推定線と若干異なる法起寺式(觀世音寺式)の伽藍配置と寺域の範囲を推定した。また、昭和17(1942)年の調査で出土した種類の遺物以外に平安時代の土器や瓦も出土したことから、伝吉田寺が平安時代まで存続していたことを確認している。調査面積は約220 m²である。

その後は、府中市教育委員会によって、開発に伴う確認調査が実施されている。具体的には、平成6(1994)年の金龍寺石垣改修に伴う調査(94伝吉田寺)、平成15(2003)年の個人住宅建築に伴う調査(0303T)、平成28・29(2016・2017)年の金龍寺書院建替に伴う試掘調査(1603T)および確認調査(1703T・1704T)である。しかしながら、いずれも狭小な範囲にとどまっている。

94伝吉田寺(「府市3」)の調査は、講堂推定基壇の南面の石積み延長線上で実施し、石組と礎石を確認した。石組は講堂基壇南辺の石積の可能性があるが、礎石は、基壇とは時期が異なる建物のもので、講堂より新しい時期の礎石建物が存在することが推定されている。また、中世後半とみられる巴文軒丸瓦が出土しており、中世の金龍寺に関わる遺物の可能性がある(註2)。

表2 伝吉田寺跡調査一覧表

調査区	調査年度	主要遺構・遺物	調査期間	調査面積	報告書
—	1942	塔・講堂跡	—	—	*1
県67吉田寺	1967	塔・講堂跡	1968年 2月 13日～ 2月 26日	約 220 m ²	「縣吉田寺67」
94吉田寺	1994	講堂跡	1995年 2月 22日～ 3月 24日	約 6.5 m ²	「府市3」
0303T	2003	講・土坑	2003年 9月 29日～ 10月 6日	約 20 m ²	「府市9」
1603T	2016	包含層	2016年 11月 24日～ 12月 5日	約 6 m ²	未報告
1703-04T	2017	包含層・石列	2017年 9月 25日～ 11月 8日	約 70 m ²	未報告
1803T	2018	掘立柱建物跡・礎石建物跡等	2018年 7月 23日～ 12月 28日	約 150 m ²	本書

*1 豊元国「吉田寺跡(現金龍寺)出土の古がわらに就いて(一)(二)」「備後史談」第19巻第3号・第8号 1942

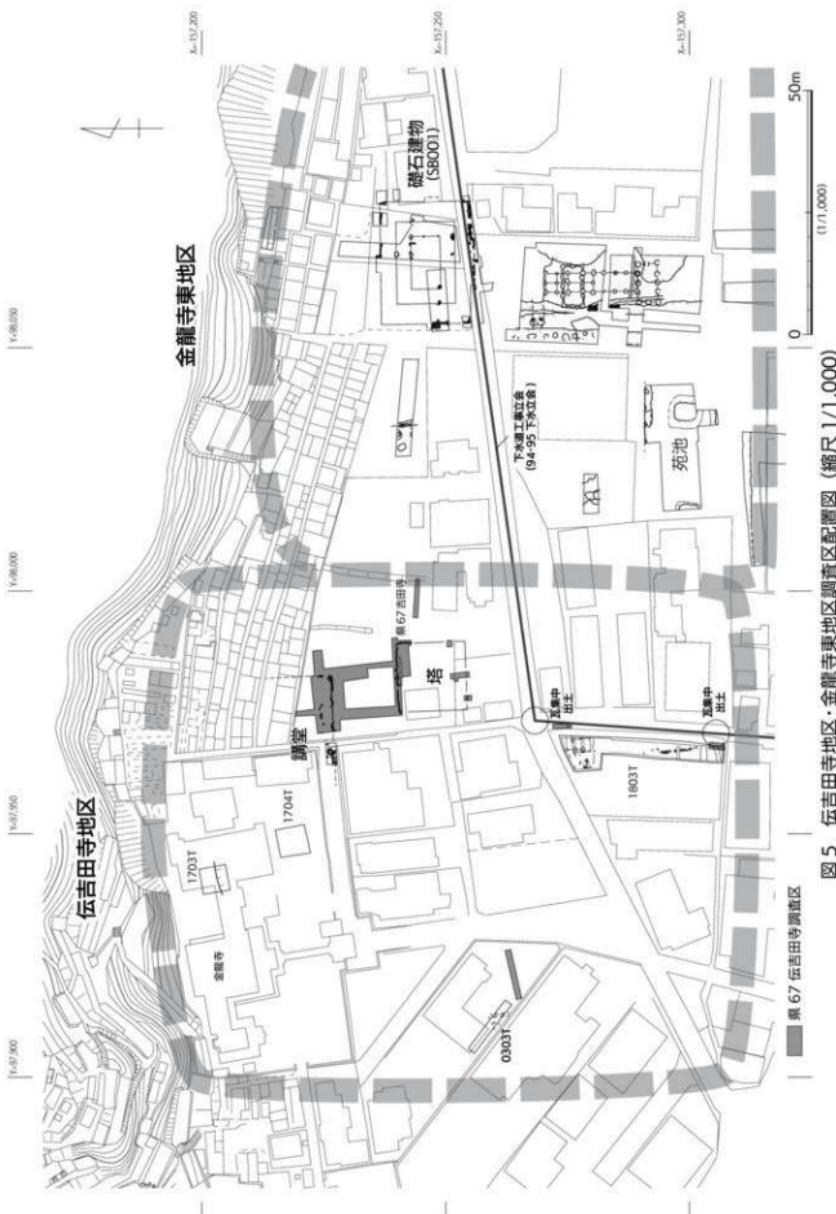


図5 伝吉田寺地区・金佛寺東地区調査区配置図 (縮尺1/1,000)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

0303T(「府市9」)の調査では、西側推定寺域区画ライン付近で実施し、南北にのびる幅約0.8～1mの砂溝が確認されたほか、柱穴の可能性がある幅約1m、深さ0.7mの平面隅丸方形の土坑を確認している。しかしながら、いずれも、幅約0.5mのサブトレーンチ内の確認のため全体像は不詳であった。

1603T、1703T、1704Tの調査は未報告であるが、1703Tでは近世以前とみられる版築状の2m以上の厚い盛土を確認したほか、北側丘陵を掘削した際のカット面を確認した。厚い盛土のため、伝吉田寺跡創建時の遺構面までは到達できなかったが、伝吉田寺の造営に際し、北側丘陵が削られて敷地等が造成されたことが確認された。

発掘調査以外では、金龍寺の参道や伝吉田寺跡付近の公共下水道管理設工事(幅約1m、深さ約1.5～2m)に伴って工事立会(94・95下水立会)を実施している。その結果、南門や中門が推定される付近で瓦類が集中して出土した。南門推定地付近からはコンテナ箱(小)で約20箱、中門推定地付近からはコンテナ箱(小)で約11箱の瓦類が出土しており、それぞれの地点に瓦葺建物の所在を示唆するものと考えられる。

既往の調査は以上で、伝吉田寺跡については、昭和43(1968)年の調査で確認された塔跡および講堂跡の基壇位置以外については不詳である。塔基壇以外の主要建物の規模、配置、区画施設や寺域についても明らかになっていない状況であり、東に隣接する金龍寺東地区の遺構との関係性も含め、全体像を復元するために多くの課題が残っている。

2. 平成30年度の調査概要

調査地点は、府中市府中町237番1と237番16に位置している。伝吉田寺主要伽藍の南の、中軸推定線上もしくはその西に隣接する場所であり、調査地点の東には元町と府中町の町境が現状道路となってほぼ真北方向に延びている。県67吉田寺調査では、現状道路にならっている調査区北部の東隣に設定されたトレーンチで、南に面を向けたような2段の石積が確認され、中門の基壇南辺の可能性がある(註3)と報告されている。また、下水道管敷設工事で、調査地の北東交差点と調査地の南東付近で古代の瓦が集中して出土し、伽藍中軸線とともに中門や南門の存在も想定される場所となっていた。

今回の調査は、伝吉田寺跡の中門や南門の手がかりを得ることを目的に、中軸推定線に近い敷地の東端に、幅3.5m、長さ約24mの調査区(1803T)を設定して実施した。また、調査途中で、礎石建物跡の規模を確認するために調査区北端において調査区を西に3.5m拡張して調査した。最終の調査面積は約150m²である。

調査の結果、調査区の北端付近で、掘立柱建物跡と礎石建物跡の一部とみられる遺構を確認し、明確ではないが築地塀の痕跡を検出した。また、南端付近においては、時期の異なる東西溝を確認するとともに、調査区の中央付近では石列を検出するなど、時期変遷が窺える遺構を確認している。

遺構番号	旧番号	遺構名	調査区名
SB001	—	塔	県67吉田寺
SB002	—	講堂	
SX006	—	不明石組遺構	
SS007	—	礎石	94吉田寺
SD010	溝1	溝	
SK011	土坑1	土坑	0303T
SD018	—	溝	
SU019	—	瓦集中部	
SB020a	—	掘立柱建物跡	
SB020b	—	礎石建物跡	
SD021	—	溝状遺構	
SX022	—	不明遺構	
SD023	—	溝状遺構	
SD024	—	溝状遺構	
SS025	—	石列	1803T
SD026	—	溝	
SU027	—	瓦集中部	
SU028	—	瓦集中部	
SB029	—	礎石建物跡	
SD030	—	溝	
SK031	—	土坑	
SK032	—	土坑	
SK033	—	土坑	
SD034	—	溝	

(註)

- 1 金龍寺の所在する元町は、旧芦品郡町村であった。
- 2 大永5(1525)年に、金龍寺が創建されたとの伝承がある。
- 3 「県吉田寺67」では、近世陶器が出土したので確実ではないが、一応中門の南辺の基壇と考えておきたいと報告している。

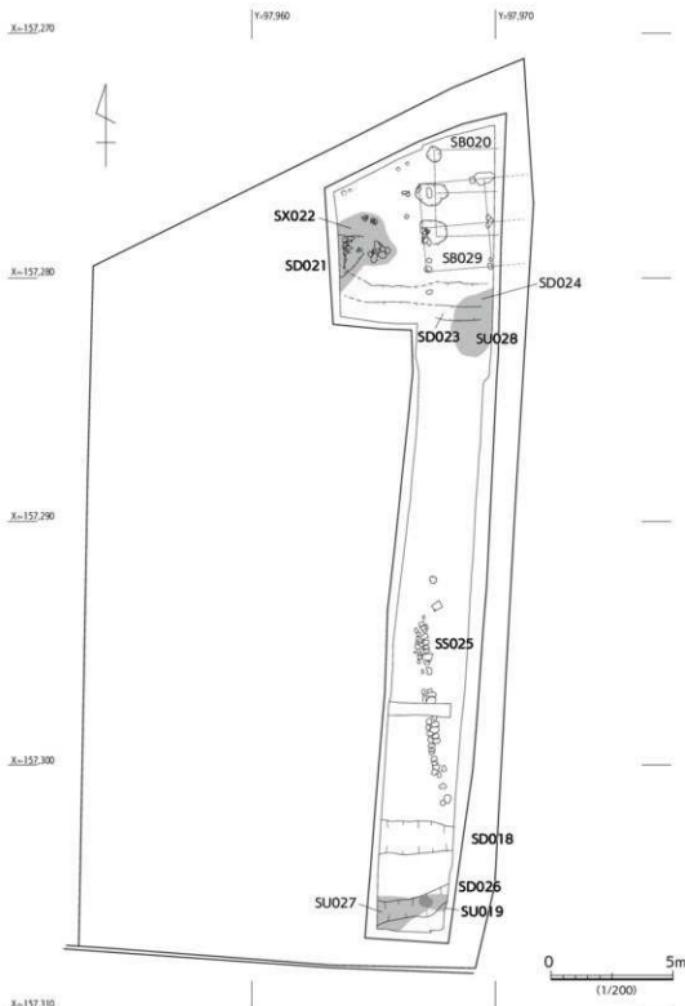


図6 主要遺構配置図 (縮尺 1/200)

第2節 層序

層序については、次のとおりである。

〈1層〉 旧表土とみられる黒褐色土(7.5YR3/1)や現代の造成土である真砂土層である。畑の耕作土および建物取り壊し後の整地土も含まれ、調査前での上面の標高は32.4～32.7mであった。

〈2層〉 にぶい褐色土(7.5YR5/4)～褐色土(7.5YR4/3)を中心とした土層で、調査区北壁東寄りから東壁全体にかけては粗細砂および砾で構成されるしまりの弱い砂層が厚く堆積している。また、東壁では植木等の移植土とみられる真砂土の堆積もみられ、近現代の造成土と考えられる。

〈3層〉 明褐色(7.5YR5/6)の砂質土層で、上面の標高は31.9～32.0mである。調査区全域に存在している。〈4層〉との境に砂層が入る場所がある。

〈4層〉 灰褐色(7.5YR5/2)の砂質土層である。近世の遺物を含まないので、中世に属する層と考えられる。層状に砂層が入る部分があり、何回かに分かれて堆積した土層とみられる。調査区北端や東端では砂が層状に厚く堆積する場所があり、SD030など、一部は溝として平面でも確認している。

〈5層〉 12世紀後半までの遺物を大量に包含している、粗細砂を多く含む砂質土層で、古代末の整地層と考えられる。上面の標高は31.4～31.6mである。調査区全域に存在しており、鉄分の沈着が顕著である。上層と下層に分けられ、上層は、特に鉄分の沈着が激しく、やや明るい色調の褐色砂質土(7.5YR4/4)であり、下層はやや暗い色調の暗褐色砂質土(7.5YR3/3)である。どちらも瓦を中心に遺物量が多い。特に、調査区の北部と南端に瓦集中部があり、その周辺は特に瓦を多く包含していた。

〈6層〉 5層に比べると量は減るが、炭化物や遺物を多く包含する層である。砂粒の割合は少なくなる。調査区北端を除いて、ほぼ調査区全域に存在する。上面の標高は31.0～31.2mである。古代の遺物を包含する層である。いくつかに分層できるが、大きくは上層と下層にわけられる。上層は、灰褐色土(7.5YR5/2)で、下層は上層より暗い色調での褐灰色土(5YR4/1)～黒褐色土(7.5YR3/2)である。

〈7層〉 建物跡(SB020・SB029)が所在する調査区北端のみに堆積している砂質土層で、古代の整地層と考えられる。上面の標高は31.3～31.4mである。土層および遺構の状況から、上層と下層に区分した。上層は、黒褐色(7.5YR3/1)～暗褐色(7.5YR3/3)の砂質土層である。掘立柱建物跡(SB020a)の上層に堆積している。下層は、褐灰色(7.5YR5/1)の砂質土で、掘立柱建物跡(SB020a)の下層に堆積している土層である。橙色粘土や黒褐色土、炭化物が層状に水平に入る場所がみられ、建物を建てるために整地された層の可能性がある。

〈8層〉 マンガン粒を含む、黒褐色(5YR2/2)の粘質土で、調査区全体に存在する。遺物はほとんど含まないが、土器小片をわずかに包含しており、弥生時代中期後半の土器片が出土している。古代以前の堆積土と考えられる。上面の標高は、30.8～31.0mである。

北端付近のみ、直上のところどころに、粒子の細かい明褐灰色(7.5YR7/1)シルト層が堆積しており、ある時期の地表面であった可能性がある。

〈9層〉 橙色(7.5YR7/6)の粘土層である。上面の標高は30.7～30.8mで、調査区内では、ほぼ水平に堆積していた。

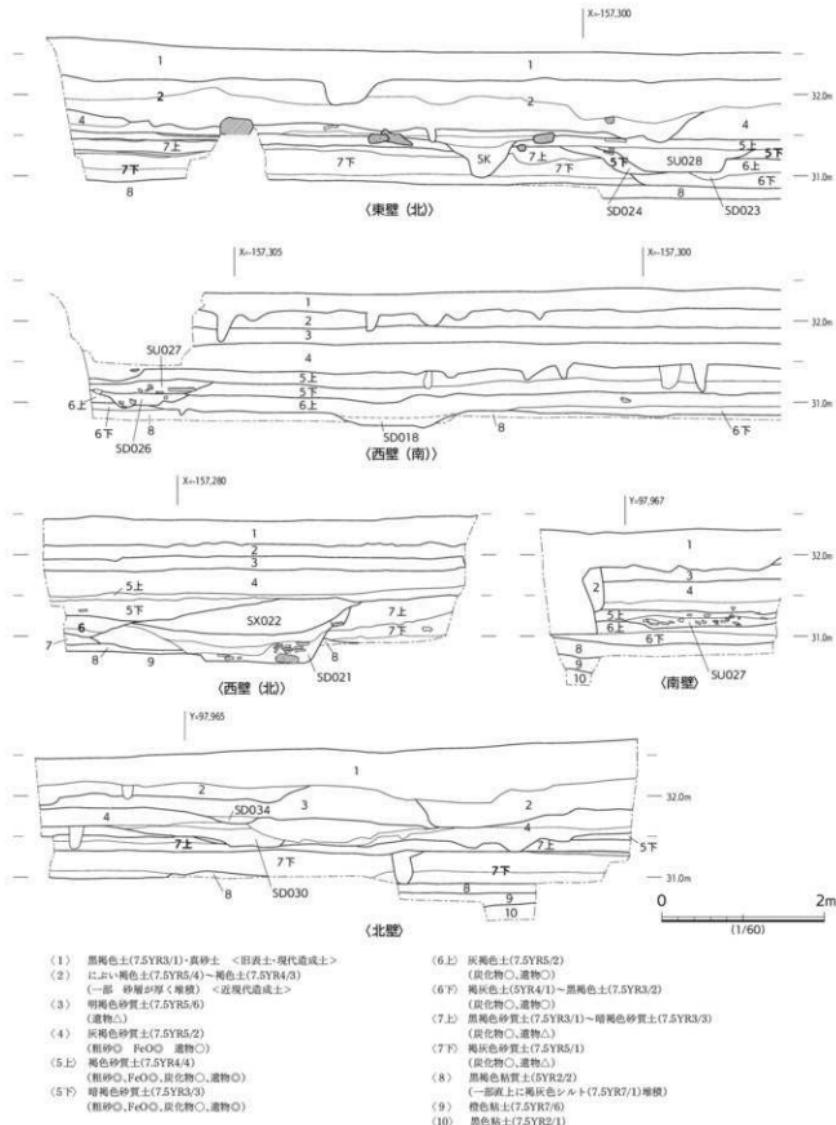


図7 調査区土層図 (縮尺 1/60)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

〈10層〉調査区の北端と南端の一部を深堀して確認した紫味のある黒色(7.5YR2/1)の粘土層である。マンガンの沈着が顕著で、遺物は出土しなかった。確認できた場所での上面標高は30.6～30.7mである。

遺構については、主に〈8層〉上面、〈7層〉中および〈7層〉上面、〈6層〉上面、〈5層〉上面で検出している。次節にて、主な遺構について報告する。

第3節 遺構について

確認された遺構には、掘立柱建物跡、礎石建物跡、溝、石列、瓦集中部などがある。主な遺構について、検出層で分けて報告する。

1. 8層検出の遺構・遺物(図8、図版2)

溝(SD018)

調査区の南寄りで、東西方向に延びる浅い溝を検出した。調査区内での主軸は、N-2°-Wで、調査区外に続いている。区画に関係する溝の可能性がある。検出面での標高は30.8m、平面規模は幅1.3~1.4m、長さ3.0m以上、深さ0.15mである。埋土は褐色砂質土で、溝の上層には①~④層(図8)が堆積していた。

埋土から古代の瓦片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物と層位から8世紀代と考えられる。

瓦集中部(SU019)

溝から約1.5m南の地点で、古代の瓦がまとまって出土した。検出面の標高は30.8~30.9mで、瓦が集中していた範囲は、東西約0.9m、南北約0.4mであった。埋土はにぶい橙色粘質土である。

瓦はコンテナ箱(小)で約3箱が出土した。平瓦と丸瓦で、すべて凸面が縄目叩きのものであった。平瓦には模骨痕のあるものが目立つ。

同じ検出面で出土した軒丸瓦を図化(図8-1)した。

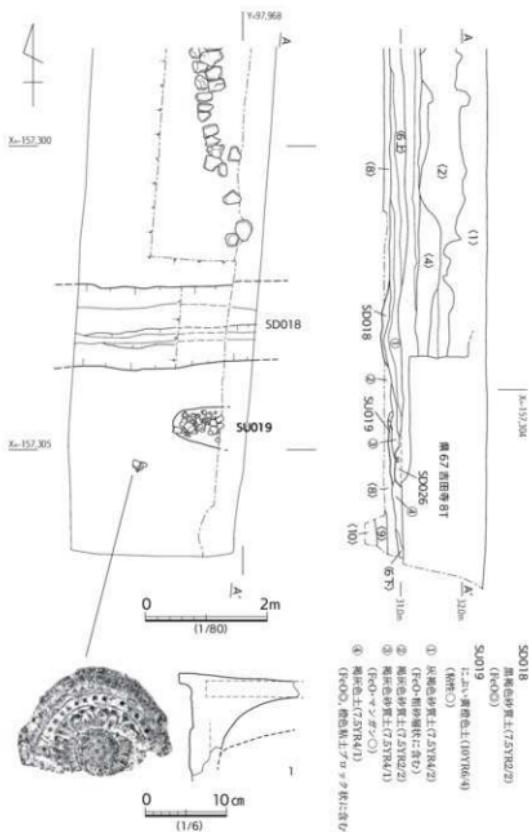


図8 SD018-SU019 遺構・遺物実測図(縮尺1/80・1/6)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

2. 7層検出の遺構(図9・10、図版1・2・3)

掘立柱建物・礎石建物(SB020a・b)

調査区北端において、掘立柱建物から礎石建物に建て替えられたとみられる建物跡(掘立柱建物跡SB020a・礎石建物跡SB020b)を確認した。

掘立柱建物跡(SB020a)の遺構としては、南北に並ぶ柱穴3基(SP020a-01・02・03)を〈8層〉上面にて検出した。しかしながら、上層の礎石建物跡(SB029)の遺構を保存するために掘り残していた場所での断面観察により、本来は〈7下層〉上面からの掘り込みであることがわかり、2基の柱穴(SP020a-01・02)については、土層断面および〈7下層〉面での平面形の一部を確認することができた。検出面の標高は、柱穴(SP020a-01・02)で31.3m前後、柱穴(SP020a-03)で30.9mであった。柱穴は、いずれも断面や平面で柱痕跡が窺えるとともに、底面標高が30.6～30.7mで、3基ともほぼ同じ深さであった。

柱穴(SP020a-01)については、平面規模が南北0.9m、東西1.1mの隅丸方形に近い不整形で、深さは0.6mであった。平面および土層断面で径20～30cmの柱痕跡が検出され、底面でも柱位置とみられる窓みが確認されている。柱穴(SP020a-02)については、平面規模が南北0.8m、東西1.3mの不整形で、深さは0.6mであった。土層断面にて柱痕跡とみられる層を確認している。底面にも径約30cmの窓みがあり、柱位置と考えられる。柱穴(SP020a-03)については、〈8層〉上面のみでの検出である。平面規模は、南北0.7m、東西0.6mで、平面形は隅丸方形に近い。深さは0.2mであった。平面および土層断面で径20cm程度の柱痕跡が確認された。底面にも径20cm程度の円形の窓みが確認されている。

各柱穴からの出土遺物は、瓦片以外は時期不明の土師器小片のみであった。遺構の時期については、〈7下層〉の出土遺物(図14-5)から8世紀後半頃と考えられる。

遺構の種別については、柱屏や幡竿支柱の柱穴である可能性も考えられたが、柱穴の規模に大小がないことや〈5層〉上面検出の礎石建物跡(SB029)位置とほぼ重なることから、掘立柱建物の可能性が高いと判断した。調査区の東側に続くとみられ、南北2間分のみの検出にとどまり全体の規模は不明である。柱痕跡からみた南北の復元規模は3.55mで、柱間は1.78m程度(6尺)であり、1尺は30cmよりわずかに短い。南北柱穴列の主軸の傾きは、N-2～3°-Wである。東西の規模は不明であるが、柱穴から調査区東壁までの距離が約2.4m離れているにもかかわらず壁面で柱穴を検出できなかったことから、東西の柱間は9尺程度と推測される。上層の礎石建物(SB029)の東西柱間が9尺であり、ほぼ同規模であった可能性が高い。

また、柱穴(SP020a-01・02)の直上で、〈7上層〉上面からの掘り込みとみられる不整形の浅い凹み(SP020b-01・02)を確認した。SP020b-01の平面規模は、南北0.7m、東西0.6m以上で、深さは0.1m前後である。SP020b-02の規模は、南北0.6m、東西0.4m以上とみられ、深さは0.15mで、上面平坦な長軸約45cmの河原石が据わっていた。埋土はにぶい黄橙色砂質土で、橙色粘土が層状に堆積している、しまりのよい土層であった。残存状況がよくないため確実ではないが、状況からみて、凹みは礎石据付穴の可能性があり、掘立柱建物(SB020a)は礎石建物(SB020b)に建て替えられたことが想定される。時期は、〈7上層〉の出土遺物から、9世紀後半頃と考えられる。

第3節 遺構について

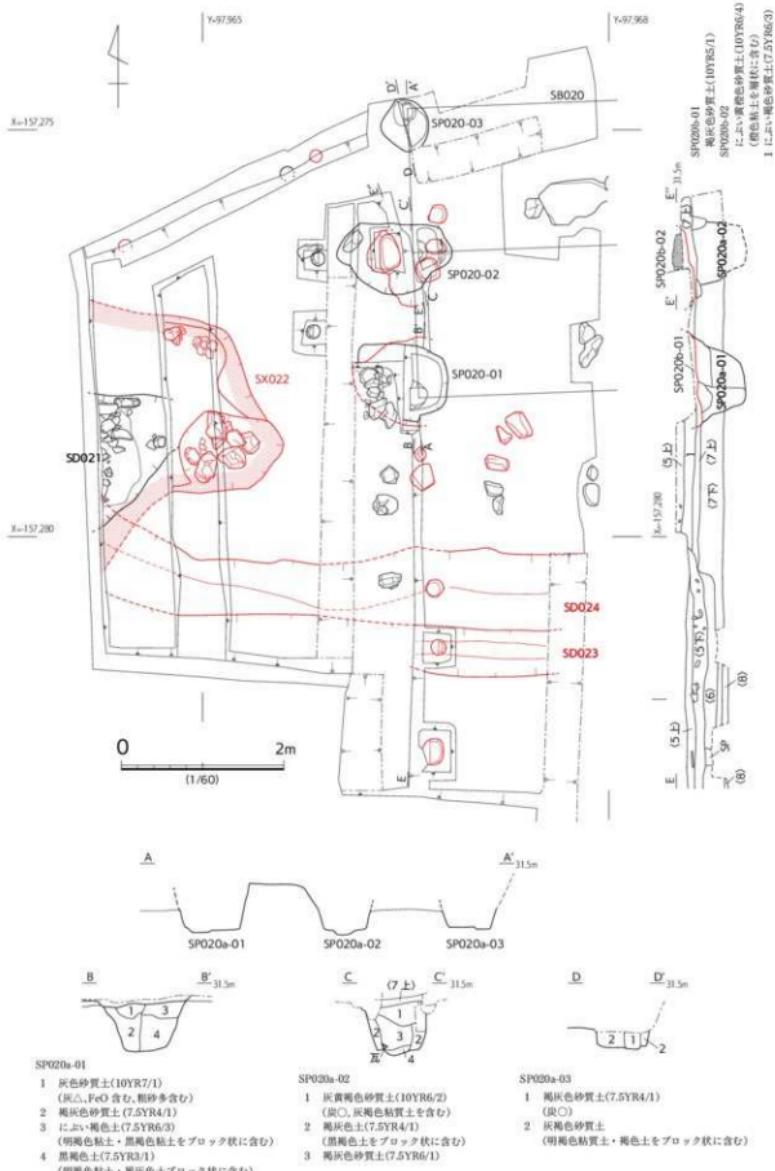


図9 SB020・SD021 遺構実測図 (縮尺 1/60)

溝状遺構 (SD021)

建物跡(SB020a・b)の西で、平面不整形の遺構を確認した。遺構は調査区外の西に溝状に続くと考えられたため、溝状遺構として報告する。

遺構は、土層断面の観察によって〈7層〉からの掘り込みであることが確認できるが、実際には〈8層〉上面にて検出している。規模は、検出面で東西0.9m以上、南北1.65mである。遺構の北辺は直線的であり、急傾斜で落ち込むのが特徴的である。断面の形状は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

SD021の埋土は3層に分けられ、時期差をもって埋まつた可能性がある。瓦が多く出土したのは、もっとも下層の堆積土からである。北側を中心に瓦が重なつて出土しており、瓦は北側から流れ込んだ可能性が高い。溝の時期は、8世紀後半以降と考えられる。

SD021の上部にはSX022のにぶい黄橙色粘質土が堆積していた。

性格不明遺構 (SX022)

建物跡(SB020a・b)の西において、黄橙色粘土が広がる地点があり、〈7層〉上面と〈5層〉の間で検出されている。性格不明遺構 (SX022)として報告する。

SX022の検出面での規模は、南北約3.3m、東西2.3m以上で、平面は不整形である。断面はレンズ状で、深さは0.5mである。一部、礎石の根石状に長辺30～50cmの礎が集中する場所が確認されている。埋土は1層で、一度に埋められたものとみられる。明黄橙色粘土を層状やブロック状に含むしまりのよい土層で、築地や土壘を構築するに適した土である。周辺の調査では、備後国府跡ドウジョウ地区(0803T)では、区画溝の埋土に黄色粘土の堆積がみられ、堆積状況から土壘もしくは築地壠の存在が推定されている。SX022の埋土も築地壠に起因する可能性がある。

溝状遺構 (SD023・024)

建物跡(SB020a・b)の南で確認された、東西方向に延びる溝状の遺構である。いずれも北側に比べて南側の立ち上がりが低いことが特徴である。それぞれ、遺構の時期は異なるが、〈7層〉の南側を遮断するような位置で確認されたため、ここで記述する。

溝状遺構 (SD023)は、〈6層〉を埋土とする。長さは6m以上で、調査区外に延びる。浅い溝状をなしている。

溝状遺構 (SD024)は、〈5層〉を埋土とする遺構である。断面では溝状をなしているが、平面では南側のわずかな立ち上がりを検出することが困難であった。

遺構の時期については、層位と埋土の出土遺物から、SD023は10世紀後半頃、SD024は11世紀～12世紀前半頃と考えられる。これらの溝状遺構 (SD023・024)は、建物跡(SB020a・b)の時期とは異なるため明確ではないが、掘立柱建物や礎石建物が建てられた場所は、南側より一段高くなっていたことが推測される。

第3節 遺構について

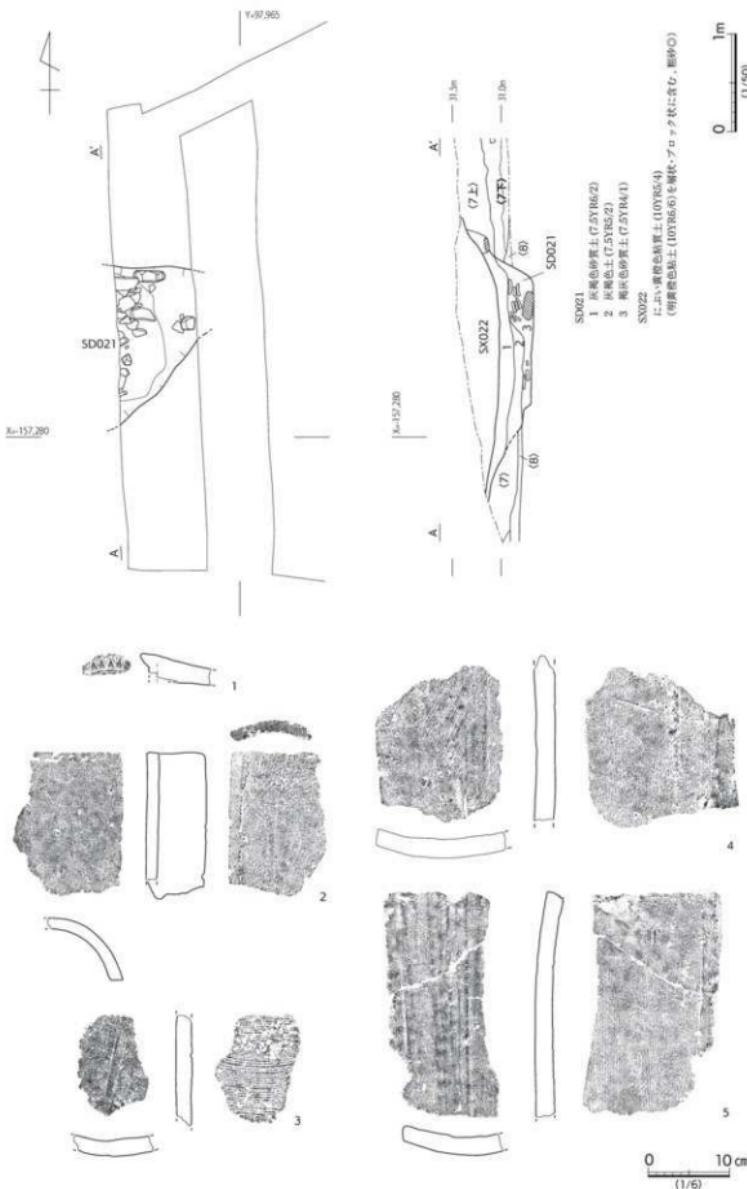


図 10 SD021 遺構・遺物実測図 (縮尺 1/50・1/6)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

3. 6層検出の遺構(図11、図版3・4)

石列(SS025)

調査区の南半の〈6上層〉上面で、幅約0.5～0.6m、長さ約7.5mの南北に延びる石列(SS025)を検出した。南端と北端が不明瞭なため当初はもっと長く続いていたと考えられる。石列は、主に2列の石がつらなったもので、残存状況が良いところでは、交互に隙間なく並べられていた。瓦が並べられた部分もあり、一部瓦で補っていった可能性がある。主軸方向はN-7°-Wである。石列上面は平坦ではないが、ほぼ同じ高さに揃えられていた。

遺構の時期は〈6層〉の出土遺物から10世紀後半～11世紀頃と考えられる。性格については、部分的な確認にとどまっており不明であるが、堀の基礎や通路に関わるものなどの可能性がある。

溝(SD026)

調査区の南端付近で、東西方に延びる溝を検出した。SD018同様に区画に関係する溝の可能性がある。主軸方向は、N-10°-W前後とみられる。

溝の規模は、幅0.8～0.9m、深さ0.2mで、調査区外に続いている。検出面の標高は31.0m前後である。

埋土は、にぶい黄橙色砂質土で、粗砂を多く含み、瓦片や須恵器、土師器の小片が出土した。

時期は、出土遺物と層位から10世紀後半～11世紀頃と考えられる。

石列の主軸方向に近く、層位的にも同時期の遺構であろう。



図11 SS025・SD026・SU027 遺構実測図(縮尺1/80)



図12 SD026 遺物実測図(縮尺1/3)

4. 5層検出の遺構（図11・13、図版4）

礎石建物跡（SB029）

調査区の北東端付近で、建物の礎石と考えられる、長軸約0.9m、短軸約0.5mの上面平坦な石を一つ検出した。他に礎石は検出できなかったが、ほぼ等間隔に並ぶような位置で確認された、長軸0.3～0.5mの石や集石地が、礎石位置の痕跡と考えられることから、南北2間、東西1間以上の礎石建物があったと判断した。SB020とほぼ同じ位置である。建物の規模は、南北約3.6m、東西約2.7m以上で、南北の柱間は約1.8m(6尺)、東西の柱間は約2.7m(9尺)であった。主軸は、真北から少し西傾するN-5°-Wとみられる。建立時期は〈5層〉の出土遺物から、12世紀後半頃と

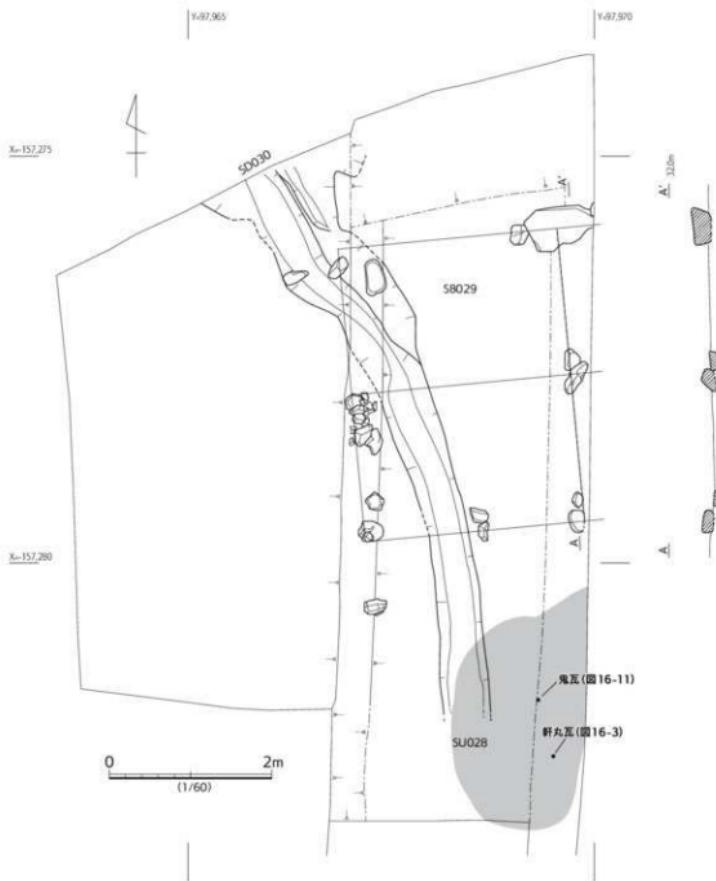


図13 SU028・SB029・SD030 遺構実測図（縮尺1/60）

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

考えられる。

遺構の性格としては、確認された位置や高い基壇をもたないことなどから、「門」の可能性が高く、門である場合には東西3間の八脚門もしくは楼門が推測される^(註1)。全体像は不詳であるが、調査区内で西側には展開しないため、建物は調査区外の東に続いているとみられる。門とした場合に、門につながる扉や柵などは確認できなかった。削平されて検出できなかった可能性がある。

瓦集中部(SU027・028)

瓦が集中する地点(SU027・028)を2ヶ所で検出した。

SU027は、調査区の南端で検出した。東西2.2m、南北1.4mの範囲に広がっており、コンテナ箱(中)で12箱の瓦が出土した。遺構の層位は〈5上層〉と〈5下層〉の間である。

SU028は、礎石建物(SB029)の南側で検出した。東西1.7m、南北2.6mの範囲に広がっており、コンテナ箱(中)で約14箱の瓦が出土した。軒瓦やほぼ完形の丸瓦なども含まれていた。遺構の層位は、SU027同様に〈5上層〉と〈5下層〉の間である。

いずれも古代の瓦で構成されており、中世の瓦は含まれていない。層位から12世紀後半に形成された遺構であるが、建物(SB020)の傍や、南門が推定される場所に近いところで検出されており、近くに古代の瓦葺建物が存在した可能性を示唆するものと考えられる。

溝(SD030)

〈5上層〉の上面で、調査区の北端から南東端に南北方向に長く延びる溝を検出した。主軸方向は、N-5°～10°-Wで、北端付近で少し西に曲っていた。溝の規模は、幅0.6～1m、深さ0.3mであり、検出面の標高は31.5m前後である。埋土は、灰褐色(7.5YR4/2)の砂質土であるが、粗砂や礫を多く包含しており、砂溝に近い。自然流路の一部と考えられる。埋土から、瓦や須恵器などの遺物が出土している。

礎石建物跡(SB029)付近のみ図示している。層位から、SB029の廃絶後に形成された溝である。

(註)

1 三浦正幸氏のご教示による。

第4節 遺物について

遺物は、コンテナ箱（中）で約300箱に及ぶ量が出土した。9割以上が瓦片で、土器は非常に少なく小片ばかりである。瓦以外の内訳としては、古代の土師器・須恵器の割合が多く、ほかは、弥生土器、縄文陶器、貿易陶器、瓦器、鉄釘、石鎚などが出土している。

ここでは、瓦と瓦以外にわけて掲載する。瓦は軒瓦を中心に掲載し、瓦以外の遺物については、特徴的なものや時期の目安になるもの、実測可能なものを抽出して掲載している。

なお、出土遺物の約半分が古代末～中世前半の整地層である（5層）から出土したもので、さらに、その上層と合わせて全体量の約7割を占めている。本書作成における遺物整理については、瓦集中部を除く遺構と（6層）以下の包含層出土遺物を優先的に洗浄し、（5層）から上層の遺物については「土器」を可能な限り抽出して洗浄した。結果的に約7割の遺物が未整理となっている。

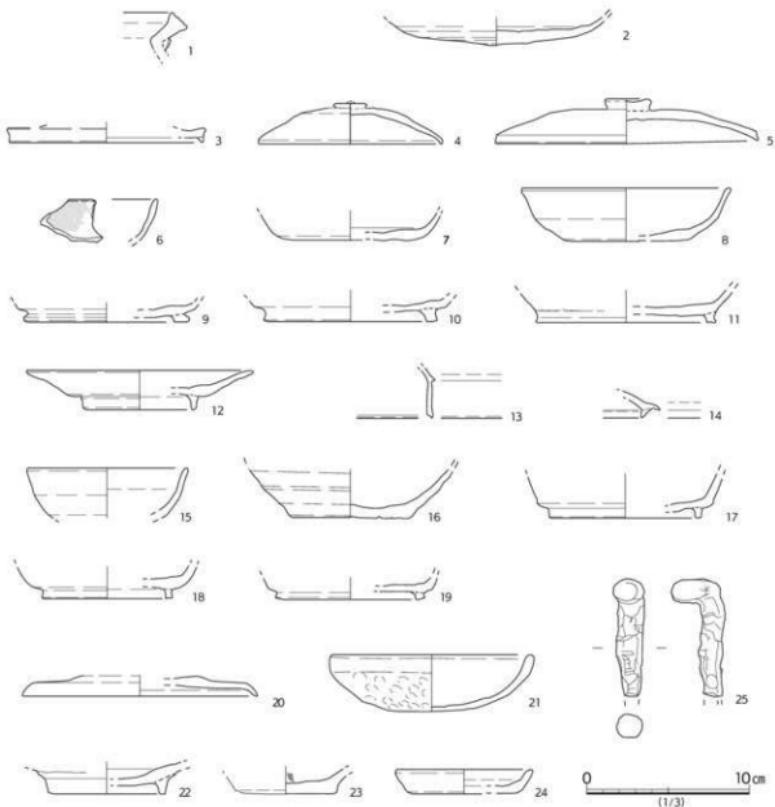


図14 遺物実測図①(6～8層) (縮尺1/3)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

図14は、〈6層〉～〈8層〉の出土遺物である。

1は、〈8層〉から出土した弥生土器の口縁部で、弥生時代中期後半のものである。

2～12は〈7層〉からの出土遺物で、すべて須恵器である。そのうち、2・3・5・7・10が下層から出土したものである。2は杯身で、底部にケズリが施された古墳時代のものである。3～5は杯蓋、6～11は杯で、そのうち、9～11には貼付の高台が付いている。12は高台付の皿で、御調窯跡群の熊ヶ迫窯跡の資料から、時期が9世紀後半頃に比定されるものである。

13～25は〈6層〉からの出土遺物である。13～19は須恵器、20～24は土師器、25は鉄釘である。13・14は杯蓋で、14はかえりを有する。15～19は杯で、17～19には高台が付く。そのうち、16は椀型に近く、10世紀以降のものとみられる。20は丹塗りの杯蓋である。21は完形の杯で、外側に顕著な指頭痕がみられる。〈6層〉でも〈8層〉の上面に近い最下層で出土した。22は高台付の杯である。23・24は皿で、23には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。24は丹塗りの皿である。25は鉄釘である。鉄釘は〈6層〉より下の層では出土していない。錆びて欠損したものばかりであるが、いずれも、頭部を折り曲げた断面方形のもので、鍛造品と考えられる。

図15は、〈3層〉～〈5層〉の出土遺物である。

1～21・27は〈5層〉の出土遺物で、22～26は〈5層〉から上の層の出土遺物である。

1・2は古墳時代のもので、1は須恵器杯身、2は土師器高杯の脚部である。これまでの調査でも、古墳時代以前の土器が出土しており、遺構は確認されていないが周辺に弥生時代や古墳時代の遺跡が存在する可能性が高い。3～8は須恵器である。3～5は杯、6は皿、7は高台付の皿である。8は托で、仏事に使用したとみられる仏教的な遺物である。9～13は土師器で、9・10は椀、11・12は杯、13は皿である。9・10は、土師質土器椀で、時期は12世紀代と考えられる。11は底部糸切りの杯で、13は灯明皿として使用されたものである。

14・15は須恵器の壺、16は須恵器の鉢である。17は龜山焼の甕片である。

18・19は縁釉陶器である。破片のため器種は確定的ではないが、18は高台付の皿で近江産のものである。19は京都産とみられる。20は瓦器椀の底部で、低い高台を有する。21は白磁椀の底部で、白磁IVかV類のものであろう。

22は須恵質の土製品で、上端部のみの破片である、ツジ地区の出土例^(註1)から、花瓶の形状をした、上端に5ヶ所の孔を持つ土製品と考えられる。用途は不明であるが、形状から仏事に関係する遺物と想定される。23は土師器の椀、24は土師器の皿である。25は瓦質の鉢で、外側に指頭痕が顕著であった。26は龍泉系の青磁椀で、外側に蓮弁が施されたものであった。

27は鉄釘で、〈6層〉出土の鉄釘(図14-25)より細く小さいものである。頭部の折り曲げもわずかである。用途の違いを表していると考えられる。

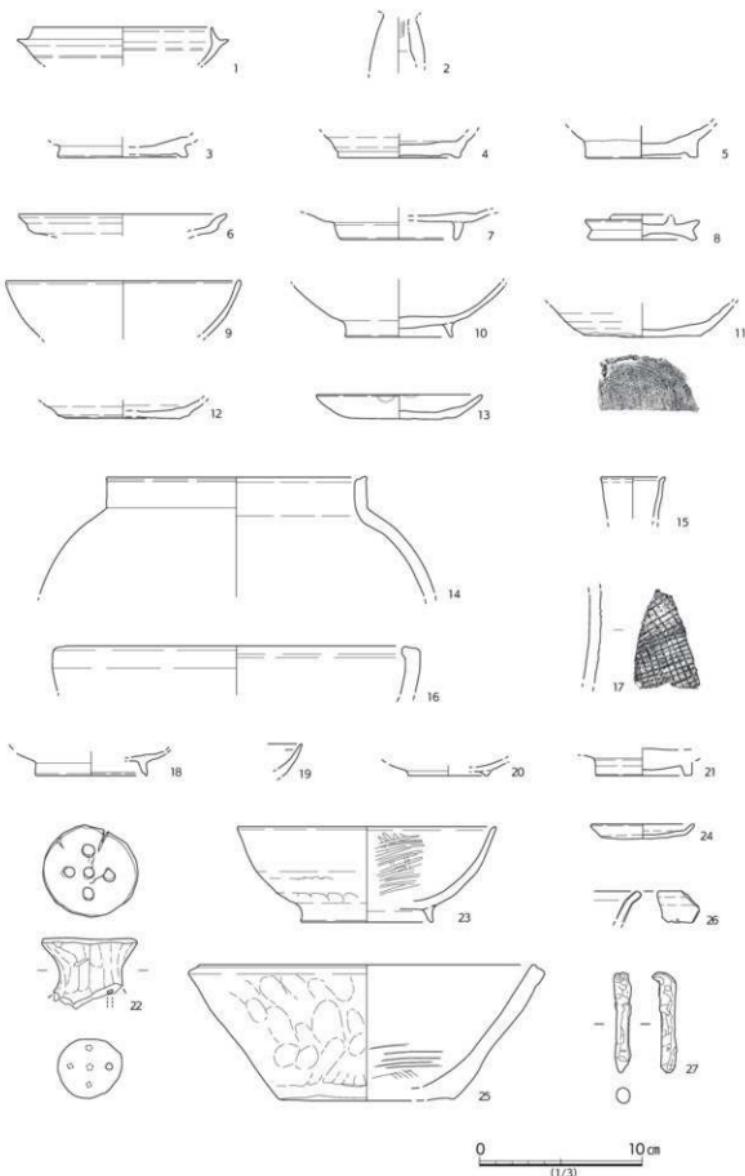


図15 遺物実測図②(4～5層)(縮尺1/3)

第3章 伝吉田寺跡(1803T)の調査成果

図16には、軒瓦と鬼瓦を掲載している。

1～5が軒丸瓦で、5を除き、既往の調査で出土例のあるものである。1が創建時のものと考えられる川原寺式軒丸瓦(1A型式)(註2)である。2～4は藤原宮式軒丸瓦(2b型式)である。4は側面の繩目タタキが顕著に残存していた。5は瓦當に珠文を配すが全体像が不明であり、時期も不詳である。瓦当厚が1.9cmとやや薄い。

6～9が軒平瓦で、6・7が藤原宮式の左偏向唐草文軒平瓦(1型式)で、8・9が平城宮式の均整唐草文軒平瓦(2型式)である。1型式の軒平瓦には、段頸と直線頸のものがあり、どちらも出土している。2型式の軒平瓦にも、段頸と直線頸のものがあるが、伝吉田寺跡では直線頸のものしか出土していない。1803Tでも、今のところ段頸の2型式は確認できなかった。

軒瓦については、掲載以外にも多く出土しているが、そのほとんどが7世紀末から8世紀初頭に伽藍を整備した際に使用された藤原宮式の軒瓦であった。備後国府系とされる平城宮式軒瓦については、これまで伝吉田寺跡で軒丸瓦の出土が確認されていないが、1803Tでも、今のところ確認できていない。

10～13は鬼瓦で、伝吉田寺跡では初めて出土した。10～12が、重圓文系の鬼瓦で、いずれも軟質であった。出土地点は、調査区の南端と北部で検出された瓦集中部(SU027・028)の周辺で出土している。同系の文様をもつ鬼瓦は、備後南部では、備後国分寺や古代山陽道の駅家跡に推定されている最明寺跡(福山市駅家町)、前原遺跡(父石町)等で出土しており、8世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

13は、小片で全体像が不明であるが、鬼面文の鬼瓦と考えられる。砂粒を多く含む硬質のもので、古代に属するものであろう。

図17には、丸瓦と平瓦を数例掲載した。なお、ほとんどの瓦が未整理で洗浄もされていないため、全体の様相は不明である。

1・2は丸瓦である。1は有段式で、2は無段式のものである。有段式の丸瓦は小片が多く、無段式のものが目立つ傾向がある。実数も無段式が多いと思われる。

3～8は平瓦である。出土した平瓦には、厚さ1cm程の薄いものも散見されるが、多くは厚さ2cm以上で、重量感があり、凹面に横骨痕とみられる凹凸のあるものが多い。3～7は、凸面調整が格子目タタキのもので、そのうち5・7は格子目タタキの後にハケ目調整が行われている。9は、(6層)上面の石列(SS025)近くで出土したものである。1枚作りの平瓦で、ほぼ完形である。重量は4.8kgあった。凸面だけでなく凹面にも繩目タタキがみられた。

(註)

1 ツジ地区の0401T、201001Tで似た土製品が出土しており、「府市10」「府市16」に掲載されている。

2 型式名は、「備國総括1」で分類した名称である。

【参考文献】

向田裕始「芸備地方における須恵器生産(2)——御調窯跡群の成立と展開——」『研究輯録X』 2000

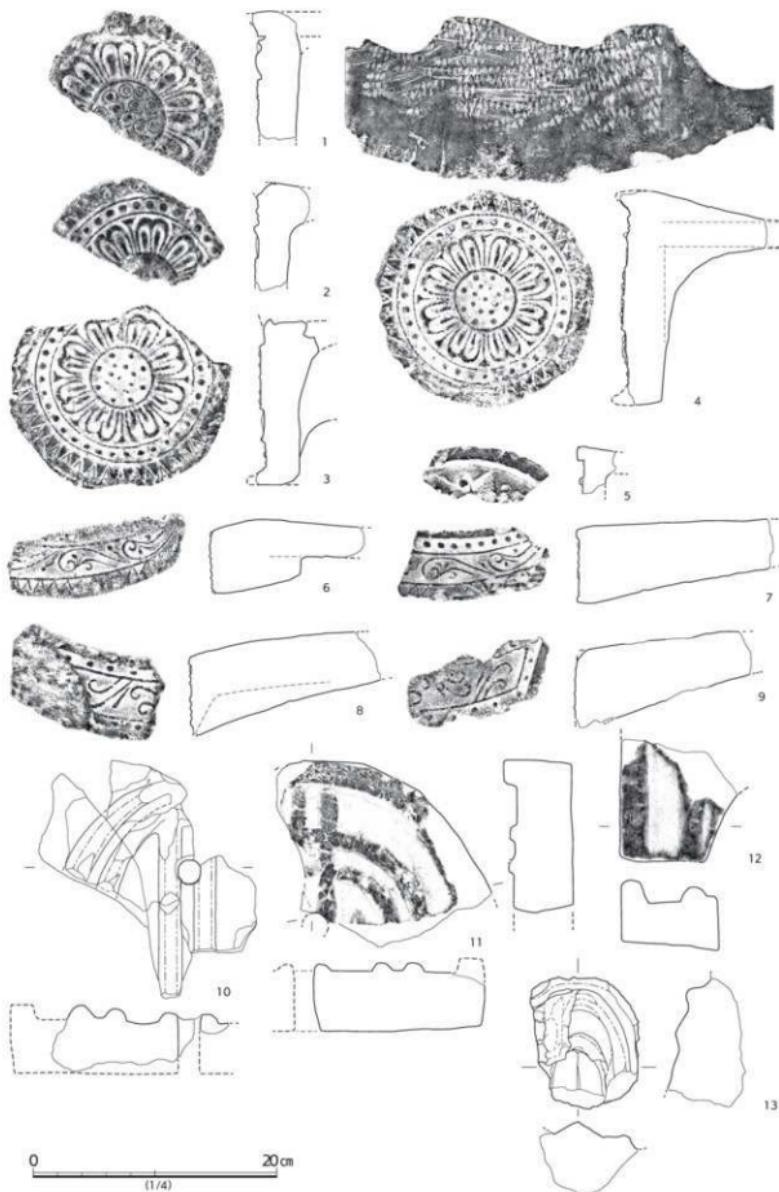


図 16 遺物実測図③(軒瓦・鬼瓦)(縮尺 1/4)

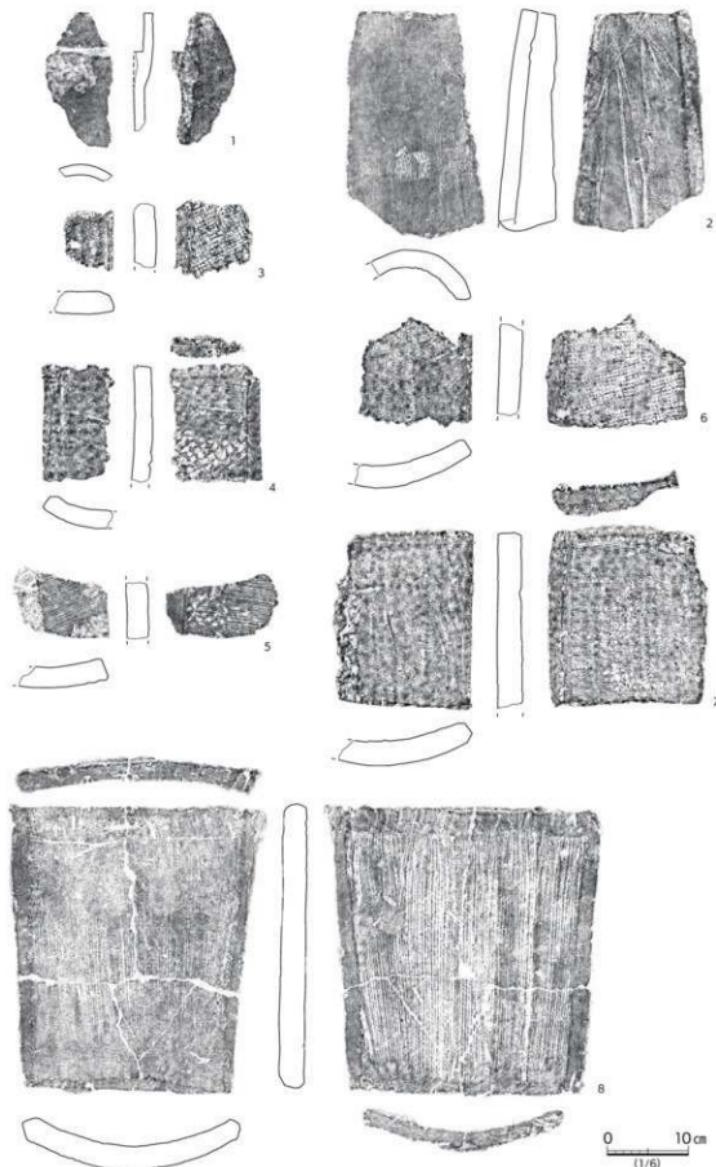


図 17 遺物実測図④(丸瓦・平瓦) (縮尺 1/6)

表4 遺物觀察表

番号	種類	法量 (cm ³ /g)				調整・文様・形態の特徴など	色・調	胎・粗面	出土地点	
		口径	底径	器高	残存					
国7 1	軒丸瓦	瓦当約15.7	厚3.6	2.1	1/2	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、側面摩滅感しい	灰黄～暗灰	○○○	近江8層板込	
国9 1	軒丸瓦	瓦当約17.5	厚3.6	2.1	1/2	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、側面摩滅感しい	灰白	○○○	SD021	
2	丸瓦	長(18.0)幅(9.3)厚1.5	小片	複井8弁、凸面ナメ、四面布目、須恵質	暗青灰	○○○	SD021			
3	平瓦	長(13.5)幅(9.7)厚2.3	小片	凸面格子目+ハタケ、四面布目、須恵質	オリーブ灰	○○○	SD021			
4	平瓦	長(20.3)幅(16.0)厚2.6	小片	凸面格子目、凹面布目、須恵質	灰・暗灰	○○○	SD021			
5	平瓦	長(22.7)幅(12.4)厚2.3	小片	凸面格子目、凹面布目、須恵質	暗灰質・底オリーブ	○○○	SD021			
国12 1	土師器 瓢	10.0	6.2	1.2	2/3	(底)へき切り	にじみ黒	△△△	SD026	
国14 1	土師器 瓢	—	—	(2.5)	口縁1/8	腰膨らむし、(口)3条凹線、(底)黏付突帯・直曲押住	青灰	△△△	近江8層	
2	土師器 瓶身	—	—	(1.7)	底部1/2(底)	ヘアリテリ	青灰	△△△	近江7層	
3	土師器 瓶	—	—	(0.8)	小片	底部部の残存、橢成数	青灰	△△△	近江7層	
4	土師器 瓶	11.6	—	(2.5)	1/4	つまみ端欠損、(内・外)ヨコナデ	黄灰・灰白	△△△	近江7層	
5	土師器 瓶	16.2	—	2.8	1/2	(内・外)ヨコナデ	灰白・灰白	△△△	近江7層	
6	土師器 瓶	—	—	(2.5)	小片	口縁部から内面に墨褐色粘着物	灰黄	△△△	近江7層	
7	土師器 瓶	約9.0	(1.7)	底部1/5	(内・外)ヨコナデ	灰白	△△△	近江7層		
8	土師器 瓶	(12.8)	(7.6)	3.2	口縁1/16(底)	へき切り、(内・外)ヨコナデ	灰白・灰白	△△△	近江7層中心	
9	土師器 高台付杯	—	10.2	底部1/5	(内・外)ヨコナデ	灰	△△△	近江7層		
10	土師器 高台付杯	—	9.25	(1.5)	底部1/4	側成不規	灰	△△△	近江7層	
11	土師器 高台付杯	—	11.0	(2.0)	底部1/6	(内・外)ヨコナデ	灰白・灰	△△△	近江7層	
12	土師器 高台付杯	14.0	7.0	2.4	口縁1/8(内・外)ヨコナデ	灰・灰	△△△	近江7層		
13	土師器 杯蓋	—	—	(3.1)	小片	(底)段あり、(内・外)ヨコナデ	粗面	△△△	中近江6層	
14	土師器 杯蓋	—	—	(1.65)	小片	(内・外)ヨコナデ	粗面	△△△	中近江6層	
15	土師器 杯	10.0	—	(3.1)	口縁	内面に墨褐色の付着物あり。(内・外)ヨコナデ	灰黄・黄灰	△△△	中近江6層	
16	土師器 杯	—	7.0	(3.0)	底部1/2(底)	ヘアリテリ、(内・外)ヨコナデ	灰黄	△△△	中近江6層	
17	土師器 高台付杯	—	9.1	(2.75)	底部1/8	(内・外)ヨコナデ	灰白・灰・灰白	△△△	中近江6層	
18	土師器 高台付杯	—	8.0	(2.0)	底部1/6(内・外)ヨコナデ	灰白	△△△	中近江6層中心		
19	土師器 高台付杯	—	9.2	(1.3)	底部1/12(内・外)ヨコナデ	黄灰・灰黄	△△△	中近江6層中心		
20	土師器 盆	14.5	7.4	(1.25)	1.8	腰膨らむし、赤彩。(内・外)ヨコナデ	浅黄褐・相	△△△	中近江6層	
21	土師器 杯	12.6	—	3.5	瓶衆窓	指捺痕顔面	にじみ橙・にじみ赤褐	△△△	中近江6層	
22	土師器 高台付杯	—	7.2	底部1/4	瓶衆	瓶衆	浅黄褐	△△△	中近江6層中心	
23	土師器 盆	—	6.15	(1.65)	底部3/4(内)縦付者	灯明面として使用	にじみ黄	△△△	中近江6層	
24	土師器 盆	8.4	6.4	1.5	口縁	瓶衆	にじみ橙・にじみ橙・粉	粗良	中近江6層	
25	鉄灯	具3(7.3), 厚3.5, 重量31.9g	先端欠損・縫合部、面部折り曲げ、断面形状は長方形	—	—	—	—	—	中近江6層	
国15 1	土師器 瓶身	10.0	—	(2.25)	口縁	(内・外)ヨコナデ	灰	△△△	近江5層	
2	土師器 瓶身	—	—	(3.5)	瓶衆小片	瓶衆	粗面	△△△	近江5層	
3	土師器 瓶	—	8.0	(1.5)	底部1/5(内・外)ヨコナデ	瓶衆	粗面	△△△	近江5層	
4	土師器 瓶	—	7.6	(1.5)	底部1/4	瓶衆	粗面	△△△	近江5層	
5	土師器 瓶	—	7.0	(2.0)	底部1/4(内・外)ヨコナデ	瓶衆	粗面	△△△	近江5層	
6	土師器 盆	12.8	—	(1.5)	口縁1/10(内・外)ヨコナデ	瓶黄・灰白	粗面	△△△	近江5層	
7	土師器 高台付盆	—	7.4	(1.85)	底部1/4(内・外)ヨコナデ	瓶衆	粗面	△△△	近江5層	
8	土師器 托	—	6.8	1.6	1/4	瓶衆	浅黄褐	△△△	近江5層	
9	土師器 桶	14.4	—	(3.45)	口縁1/8(内)ミガキ	瓶白・西黄褐	△△△	近江5層		
10	土師器 桶	—	6.6	(3.4)	底部3/4	瓶白・西黄褐	△△△	近江5層		
11	土師器 杯	—	7.2	(2.1)	底部1/3(底)赤切り	瓶白	△△△	近江5層		
12	土師器 杯	—	7.0	(2.2)	底部1/6	瓶白	△△△	近江5層		
13	土師器 盆	10.2	6.4	1.5	4.5	腰膨らむし。(底)へき切り、口縁1/3所保付唇、灯明面	にじみ黄・橙	△△△	近江5層	
14	須恵器 盆	16.0	—	(7.4)	口縁1/8	短脚盆・口縁付近自然輪付唇	灰白・灰	△△△	近江5層	
15	須恵器 盆	—	4.0	(2.6)	口縁1/6(内・外)ヨコナデ	瓶白	△△△	近江5層		
16	須恵器 盆	20.8	—	(2.8)	口縁1/12(内・外)ヨコナデ	瓶黄・灰白	粗良	近江5層		
17	瓦質土器 楕	—	—	小片	山形山形カ、内)ナゲ	灰	△△△	近江5層		
18	碌陶胸器 楪か	—	6.85	(1.45)	底部1/2	助士は底膨、底面で輪脚、近江灰。(内)腰膨輪脚	助士・腰膨輪脚・輪・助士オフ	粗良	中近江5層	
19	碌陶胸器 楪か	—	—	(2.05)	小片	助士は須恵器、京都山形	助士・黄灰・輪・須・須折モリナ・助士灰	中近江5層		
20	瓦器 楪	—	4.8	(1.1)	底部小片	片口ギヤ不明、正面三角形の輪脚高台あり	助士・灰白・難・灰白	中中精良	中近江5層	
21	白磁 楪か	—	5.9	(1.7)	底部1/4	輪脚は置脂。(内)真入あり	助士・灰白・難・灰白	中中精良	中近江5層	
22	須恵器 日土製品	上面5.6	—	上端の瓶底付品	瓶底付品、上面5.5所孔あり、側成堅繩	瓶白・暗灰	粗良	近江4層		
23	土師器 高台付盆	18.0	8.2	5.9	1/10	口縁付高台・瓶底付高台あり	瓶灰・灰黄・暗灰	△△△	近江4層	
24	土師器 盆	6.4	5.2	9.0	1/10	口縁付高台・瓶底付高台状底張	瓶灰・灰黄・暗灰	△△△	近江4～5層	
25	瓦質土器 楪	22.0	10.8	8.4	1/6	(内)瓶底付輪脚	瓶灰・灰黄	△△△	近江4～5層	
26	青磁 楪か	—	—	—	小片	(内)瓶底付、瓶底輪脚	助士・灰白・難・瓶モリナ	粗良	近江4～5層	
27	秋刀	大きさ(6.2), 厚さ1.0, 重量10.9g	硝眼鏡、硝眼鏡わざかに折り曲げ、断面形状は長方形	—	—	—	—	—	中近江5層	
国16 1	軒丸瓦	瓦当約16.5	厚3.0	2.1	2/3	複井8弁蓮瓣文、複井8弁、外縁斜脚	黒灰	○○○	中近江5層	
2	軒丸瓦	瓦当約17.5	厚2.6	2.1	2/3	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、側面黑色面	黒褐	○○○	中近江3～4層	
3	軒丸瓦	瓦当約17.5	瓦厚2.9	2.1	2/3	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、胎土細かい	灰白	△△△	SUD28	
4	軒丸瓦	瓦当約17.5	瓦厚2.9	2.1	2/3	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、側面ナメ、胎土細かい	明青灰	△△△	SUD28	
5	軒丸瓦	瓦当約17.5	瓦厚1.9	2.1	2/3	複井8弁蓮瓣文、蓮子1+8+8、側面ナメ、胎土細かい	にじみ	△△△	中近江5層	
6	平平瓦	瓦当高5.1	西高1.7	2.1	2/3	左側向草文、右側輪脚、輪脚形をく上げる	黒褐	○○○	SUD28	
7	軒平瓦	瓦当高5.9	—	2.1	1/4	左側向草文、右側輪脚、輪脚形をく上げる	灰	○○○	中近江5層	
8	軒平瓦	瓦当高(6.4)	—	2.1	1/4	左側向草文、右側輪脚、輪脚形をく上げる	黒褐	○○○	中近江5層	
9	軒平瓦	瓦当高6.6	—	2.1	1/4	左側向草文、右側輪脚、輪脚形をく上げる	黒褐	○○○	中近江5層	
10	鬼瓦	厚(4.8)	空(1.6)	2.1	2/3	瓦当1/5	重圓文、助士一側く軟質	青	△△△	中近江5層
11	鬼瓦	厚4.4	—	5.6	2.1	1/4	重圓文、浮出あり、裏面側脚ナメ、助士細かく軟質	灰	○○○	SUD28
12	鬼瓦	厚3.5	—	5.1	2.1	1/4	重圓文、裏面側脚ナメ、助士細かく軟質	灰	○○○	中近江5層
13	鬼瓦	厚6.2	以上	—	小片	鬼面文、介字無地、輪脚形をく上げる	灰	○○○	近江4～5層	
国17 1	丸瓦	厚(14.5), 幅(6.5)	厚2.3	2.1	2/3	有段式、凸面横目+ナメ、凹面布目	灰	△△△	SUD19	
2	丸瓦	厚(16.0), 幅(6.2)	2.1	2/3	無段式、凹面横目+ナメ、凹面布目	灰白・黄質・黄灰	△△△	SUD28		
3	平瓦	厚(16.0), 幅(7.3)	2.1	2/3	凹面横目+ナメ、凹面布目	灰・灰白・暗灰	△△△	近江5層		
4	平瓦	厚(14.5), 幅(6.6)	2.1	2/3	凹面横目+ナメ、凹面布目	灰・灰白	△△△	近江6層		
5	平瓦	厚(17.0), 幅(11.0)	2.1	2/3	凹面横目+ナメ、凹面布目	黒褐・黒褐・灰	△△△	近江5層		
6	平瓦	厚(11.0), 幅(14.0)	2.1	2/3	凹面横目+ナメ、凹面布目	灰黄・淡黄	△△△	中近江5層		
7	平瓦	厚(21.6), 幅(16.4)	3.2	1/4	凹面横目+ナメ、凹面布目	黒褐・明青灰	△△△	SK019		
8	平瓦	厚35.0, 幅29.2	厚3.2	—	—	凹面横目+ナメ、凹面布目	灰黄・灰褐	○○○	中近江6層上	

第5節 遺構の変遷（図18）

1803Tで確認された主な遺構について、検出層位や出土遺物をもとに、おおまかに時期をA～D期に区分して、現段階での遺構の時期的変遷を試みたい。

【A期以前】：7世紀後半頃

伝吉田寺の創建期にかかるA期以前の遺構は確認されなかった。しかしながら、遺物としては、かえりのある須恵器杯蓋（図14-14）や、川原寺式軒丸瓦（図16-1）が出土している。

【A期】：8世紀前半頃

A期は〈8層〉上面検出の遺構で、東西方向の溝（SD018）や瓦集中部（SU019）がある。時期については、遺構埋土から瓦が出土しており、8世紀前半頃と考えられる。

SD018については、調査区幅が狭いため明確ではないが、主軸はN-2°-W程度で塔や講堂跡と同様とみられ、主要伽藍の整備に伴う遺構の可能性がある。深さが約15cmと浅く区画溝と断定はできないが、位置的に寺域の南辺や南門が想定されていた地点にも近いことから、伝吉田寺の南辺の区画施設に関係する溝の可能性がある。

【B期】：8世紀後半～10世紀頃

B期は、主に〈7層〉の検出遺構で、建物（SB020）や溝状遺構（SD021）などである。SD018も8世紀後半頃までは存続している可能性があると推測した。

調査区の北端において、8世紀後半頃に掘立柱建物（SB020a）が造営されている。南北2間分を検出したのみで全体像は不明であるが、主要堂塔の真南中央付近に位置しており、位置的に門の可能性がある。八脚門を想定した（註1）場合には、南北12尺、東西27尺程度の規模が推測される。また、建物は9世紀後半に礎石建物（SB020b）に建て替えられた可能性もある。

SD021の構築時期については、平面はもとより土層断面でも掘り込み面の確定が難しかったので、SB020aに伴う可能性もあるが、SB020bに伴うと推定した。建物が門であるならば、遮蔽施設に伴う外溝の可能性があり、SX022の堆積状況から築地壠であった可能性も得られた。

【C期】：11世紀～12世紀前半頃

C期は主に〈6層〉上面検出の遺構で、石列（SS025）や溝（SD026）がある。時期は、〈6層〉と〈5層〉の出土遺物から、11世紀から12世紀前半頃と考えられる。また、〈6層〉は、〈7層〉の上に堆積していないため、礎石建物（SB020b）も存続している可能性がある。

SS025の主軸はN-7°-W、SD026の主軸はN-10°前後-Wで、どちらも塔や講堂基壇より西に傾いている。SS025の性格については明らかにし難いが、SD026については、SD018同様に寺域の南辺を区画する施設に関係する溝の可能性を考えたい。

【D期】：12世紀後半～13世紀頃

D期は〈5層〉で検出された遺構である。〈5層〉は調査区全体を覆う整地層で、出土遺物から整地された時期は12世紀後半頃と推定される。瓦を多量に包含しており、調査区の北部と南端の2ヶ所で、瓦集中部（SU027・SU028）が検出されている。そして、整地後の12世紀後半に、新たな礎石建物（SB029）が建築されている。主軸はN-5°-W程度であり、塔や講堂より西に傾いている。また、〈5層〉は多量の古代瓦を包含しており、この頃には、古代から続く堂塔が廃絶している可能性が高いと考えられる。

(註)

1 塔を有する寺院であり、時期的にも八脚門の可能性が高いとみられる。三浦正幸氏のご教示による。

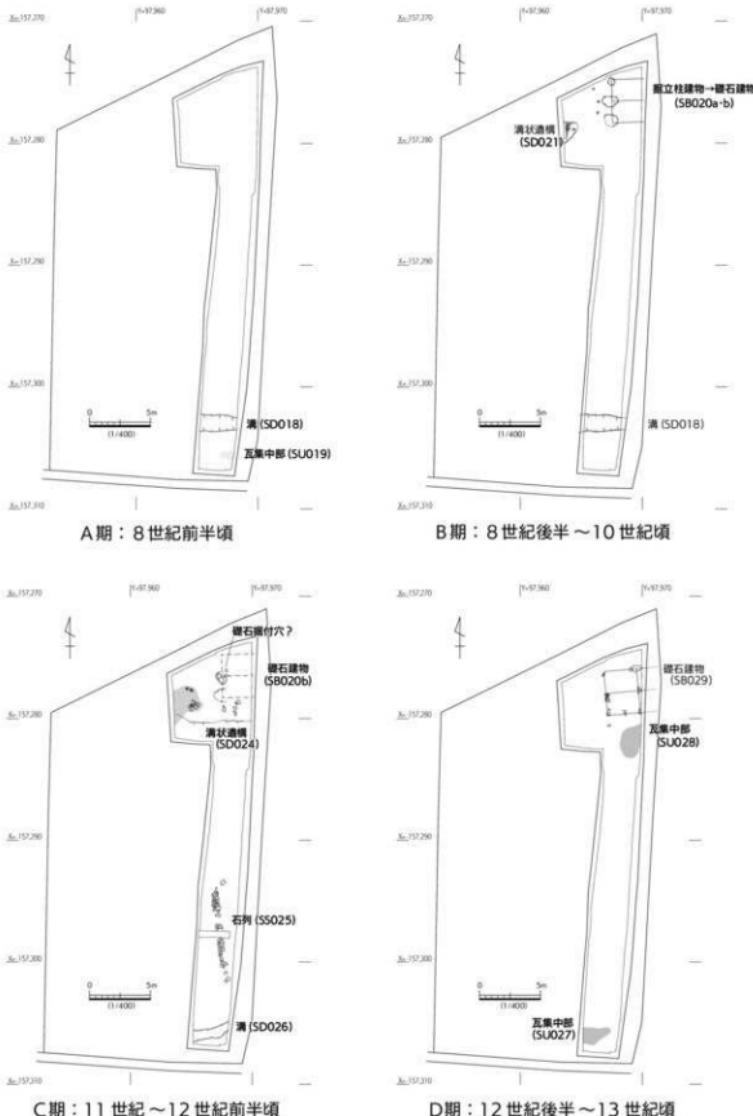


図18 主要遺構変遷図(縮尺 1/400)

第4章　まとめ

1. 古代の遺構について

建物跡について

塔・講堂といった主要建物の南方中軸線上の中門が想定されていた付近で、8世紀後半頃の南北12尺の掘立柱建物跡(SB020a)が確認された。また、掘立柱建物(SB020a)は9世紀後半頃に礎石建物(SB020b)に建て替えられたことも想定される。建物は調査区の東側(現状道路)に展開するため全体像は不詳であるが、遺構の性格については、位置関係から「門」の可能性が高いとみられる。八脚門を想定すれば、東西規模は27尺程度(8m程度)と推測される。

遮蔽施設については、明確な遺構としては確認できなかったが、性格不明遺構(SX022)が築地塀の痕跡とみられ、溝状遺構(SD021)は外溝の可能性がある。SD021の瓦出土状況から、築地塀は瓦葺であった可能性があり、9世紀後半頃～10世紀頃には瓦葺の築地塀が構築されていたことが推測される。主要堂塔との位置関係は図19に示した通りである。

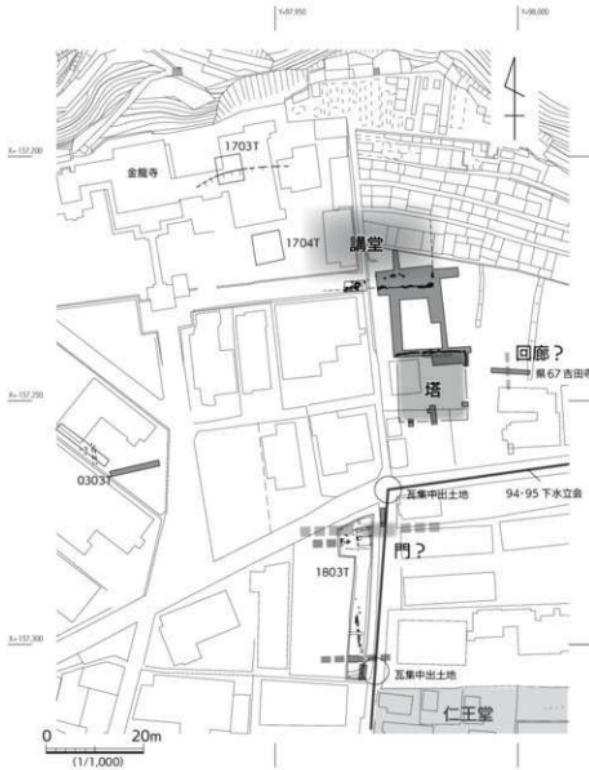


図 19 伝吉田寺跡主要古代遺構配置図 (縮尺 1/1,000)

なお、これらの遺構は塔や講堂等の主要堂塔が整備された時期とは異なるため、7世紀末から8世紀前半の「門」(いわゆる中門)は別に存在するとみられ、今後、1803Tより北側において中門や回廊等が確認される可能性がある。

東西溝について

建物跡(SB020)の南方約10mの地点で、8世紀前半頃に推定される幅約1.4mの東西溝(SD018)が確認された。塔や講堂が整備された時期のものとみられ、主軸も同じであることから、南辺の区画施設に関係する溝の可能性がある。また、11世紀頃の東西溝(SD026)も、SD018同様に南辺の区画に関係する溝の可能性があり、同様の場所が伝吉田寺の寺域南辺として継続されていたことが推定される。

寺域の南辺については、近年の下水管埋設工事(94・95下水立会)で古代瓦が多く出土したことと、地割の状況から、1803T調査区南端の敷地境界線付近が南辺と推測されてきた。調査区の南東は、字名を「仁王堂」といい、金龍寺が所蔵する像高約1.6mの朽ちた仁王像の出土土地と伝わっている。この仁王像の製作年代は明らかでないが、古いとみられており、付近に古代末から中世の南門が存在したことを示唆する遺物と考えられる。

今後調査が進展すれば、より南辺の状況や南門の所在等が明らかになるであろう。

2. 中世前半の遺構について

12世紀後半頃に調査区全体が広く(5層)で整地され、建物(SB020)とほぼ同じ場所に、礎石建物(SB029)が造営されたことが確認された。遺構の状況や位置から「門」と推定される。

また、整地層である(5層)は多量の瓦と土器を包含しており、古代以来の建物群が完全に廃絶して、新しい伽藍が整備されたことも想定される。

94伝吉田寺の調査では、講堂基壇上の建物より新しい時期の礎石(SS007)が、講堂基壇の位置で確認されており、講堂があった場所に別の礎石建物が建てられたことが判明している。時期は、礎石の掘り方が講堂の基壇外装とみられる平安時代後半の不明石組遺構(SX006)より新しいことから12世紀後半頃と推定され、講堂の場所においても新たな礎石建物が造営されたことが推測できる。

このことから、12世紀後半頃に新たな建物が整備されるなどして、中世前半では確実に伝吉田寺が存続していたことが窺える。

3. 重圓文系鬼瓦について

伝吉田寺跡では初出土となる鬼瓦が2種出土した。そのうち重圓文系鬼瓦は、備後国内では備後國分寺や古代山陽道の駅家跡と推定される最明寺跡(品治駅)、前原遺跡(芦田駅)などから同系のものが出土することから、備後國府系とされる平城宮式軒瓦同様に、備後国内の官衙関連施設で用いられたものと捉えることが可能であり、伝吉田寺が国府と密接に関わる寺院であったことの状況証拠の一つと考えられる。



図20 金龍寺所蔵出土仁王像

4. まとめ

1803Tで確認された遺構については全体像が不明であるものが多いが、現段階での遺構や遺物の整理状況からみた遺跡の価値付けを行い、まとめとしたい。

伝吉田寺は、備後南部の中核的寺院として捉えられているとともに、国府域に存在する寺院として、備後國府成立当初から國師らが主導する國府の仏教行事の一端を担っていたと考えられ、國分寺建立以後も準官寺として國府の仏教行事の一端を担っていたことが想定されている。

1803Tでは、伝吉田寺の主要伽藍の一部とみられる8世紀後半以降の「門」の可能性がある建物跡や瓦葺の築地塀の痕跡が確認されたほか、寺域南辺の区画に関わるとみられる東西溝などが確認され、主要伽藍の南方における状況の一端が明らかになった。また、遺物については、国衙の主要建物に使用された軒瓦と同範の平城宮式軒平瓦に加えて重圓文系鬼瓦が出土し、國府との関わりが窺える状況証拠も増えて、所在地・創建時期・継続期間・規模・出土遺物からみて、國府と密接に関わる寺院であったこともより明らかになった。

また、伝吉田寺については、國府北方の亀ヶ岳に所在する平安初期創建の山林寺院青目寺と同じ天台宗の寺院であったという伝承があるなど、青目寺とも深い関わりをもち、ともに國府に関わる寺院のネットワークを形成して宗教面での國府機能の一部を担っていたことが想定されている。今回の調査で、伝吉田寺が古代末から中世前半に新しく建物を整備するなどして中世前半までは確實に存続したことが明確になったことから、青目寺と同じ南北朝頃まで存続した寺院であったことも想定できるようになった。中世の備後國府中の状況を知る手がかりのひとつが得られたと考えられる。

このように、1803Tの調査では、國府の重要施設のひとつであったとみられる伝吉田寺跡について、主要伽藍南方の状況の一部が想定できるようになったとともに、古代から中世前半にかけての遺構変遷の一端が明らかになった。東接する金龍寺東地区の瓦葺礎石建物跡(SB001)は宗教施設である可能性も指摘されているが、これらも含めて、今後調査が進展することによって、備後國府の國府域における宗教施設の在り方やその展開がより明らかになるものと考えられる。

【引用・参考文献】

- 谷重豊季「備後國府付近の山陽道」「古代交通研究会」第5号 1996
- 谷重豊季「平安時代初期の青目寺について」「もとやま」第31・32号 府中市本山町郷土史会 2004
- 土井基司「備後國府と本山の文化財」「もとやま」第38号 府中市本山町郷土史会 2014
- 広島県教育委員会「伝吉田寺跡発掘調査概報」 1968
- 府中市教育委員会「備後國府関連遺跡1」 2016

【史料】

- 馬屋原重帶「西備名区」 1804
- 菅茶山「福山志料」 1809



図21 備後國府系瓦の分布と古代山陽道の駅家
(縮尺 1/600,000)

引用:高橋美久二「古代交通の考古地理」大明堂1995……部改変

図 版



1803T 調査前状況(北から)



調査区北区・東壁(西から)



調査区西壁(南寄り)(東から)



調査区西壁(北)(東から)

図版 2



調査区南壁(北から)



調査区北壁(西半)(南から)



SD018検出状況(北から)



SD018土層(調査区東壁)(西から)



SD018・SU019(東から)



SU019検出状況(南から)



SB020(東から)



SP020-01土層堆積状況(東から)



SP020-02 土層堆積状況(東から)



SP020a-03 検出状況(南から)



SP020a-03 土層堆積状況(東から)



SP020b-01・02 検出状況(東から)



SD021 瓦出土状況(東から)



SD021(北から)



SS025(北から)



SS025 検出土層堆積状況(北から)

図版4



SD026検出状況(北から)



SD026・SU027土層堆積状況(東から)



SB029・SD030(南から)



SU028(南から)



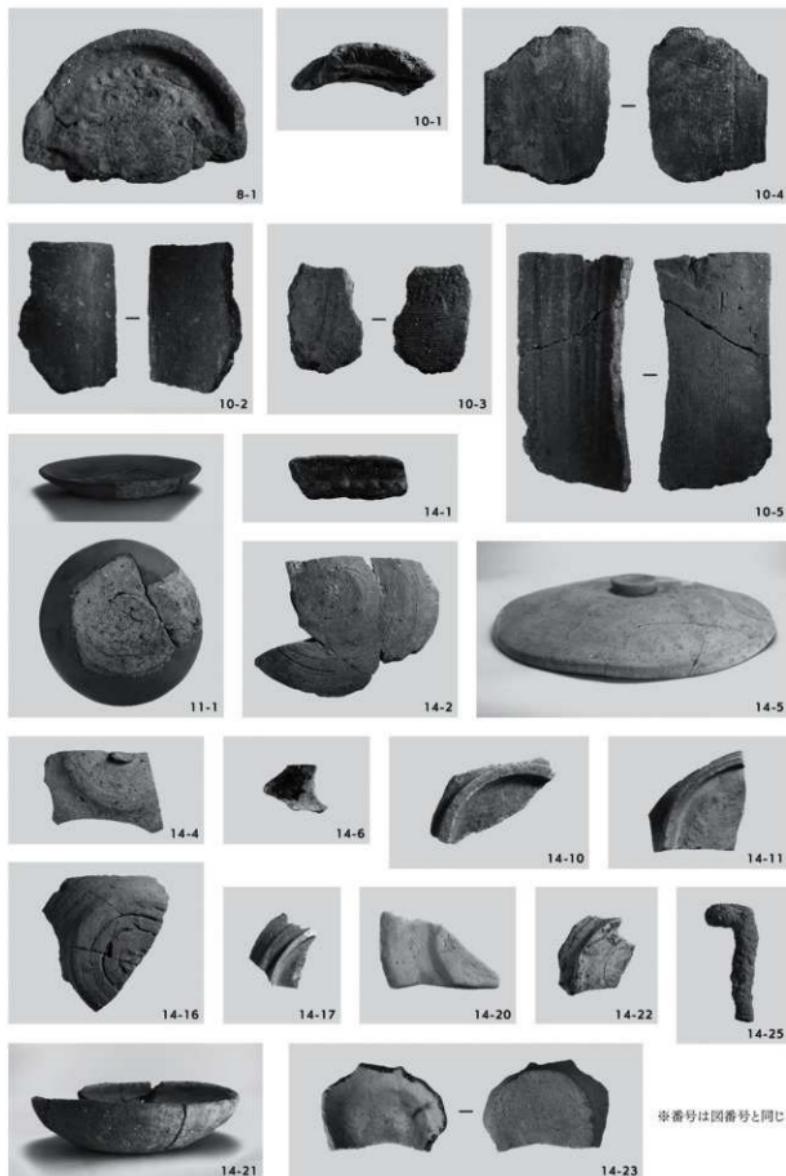
SB029・SU028(北から)



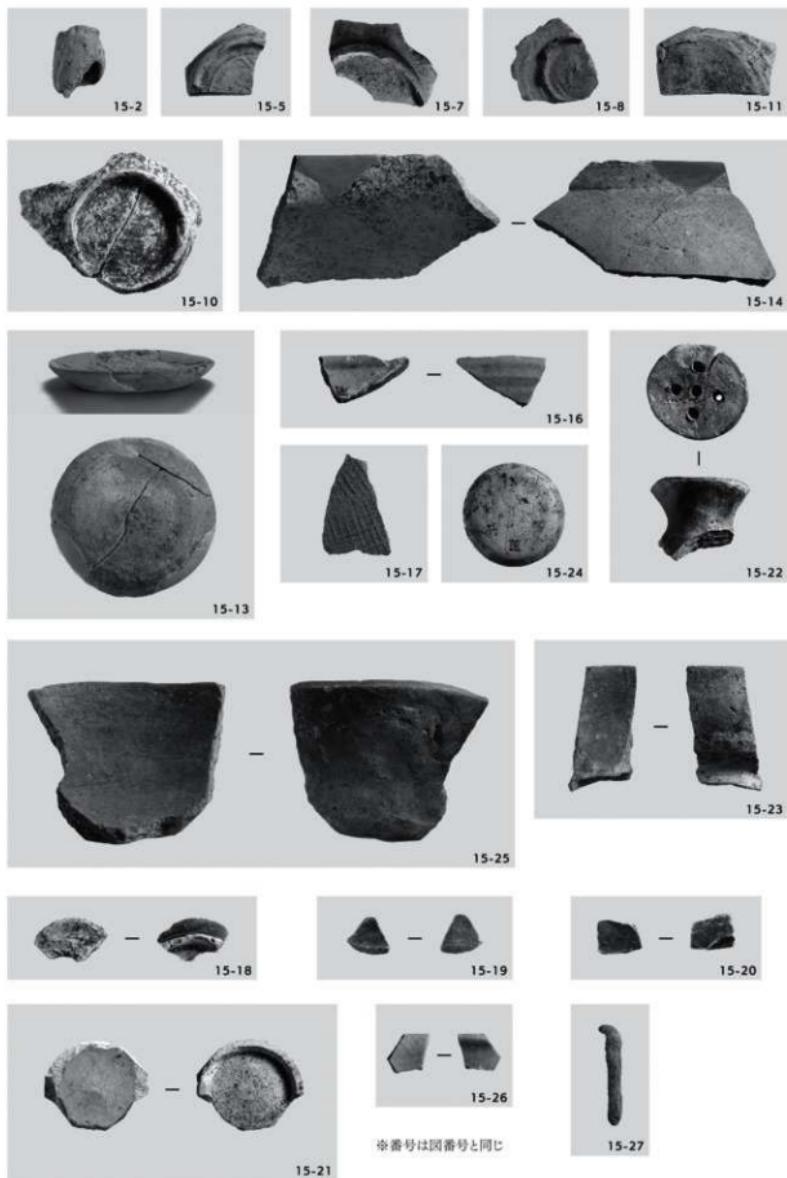
SB029・SD024(西から)

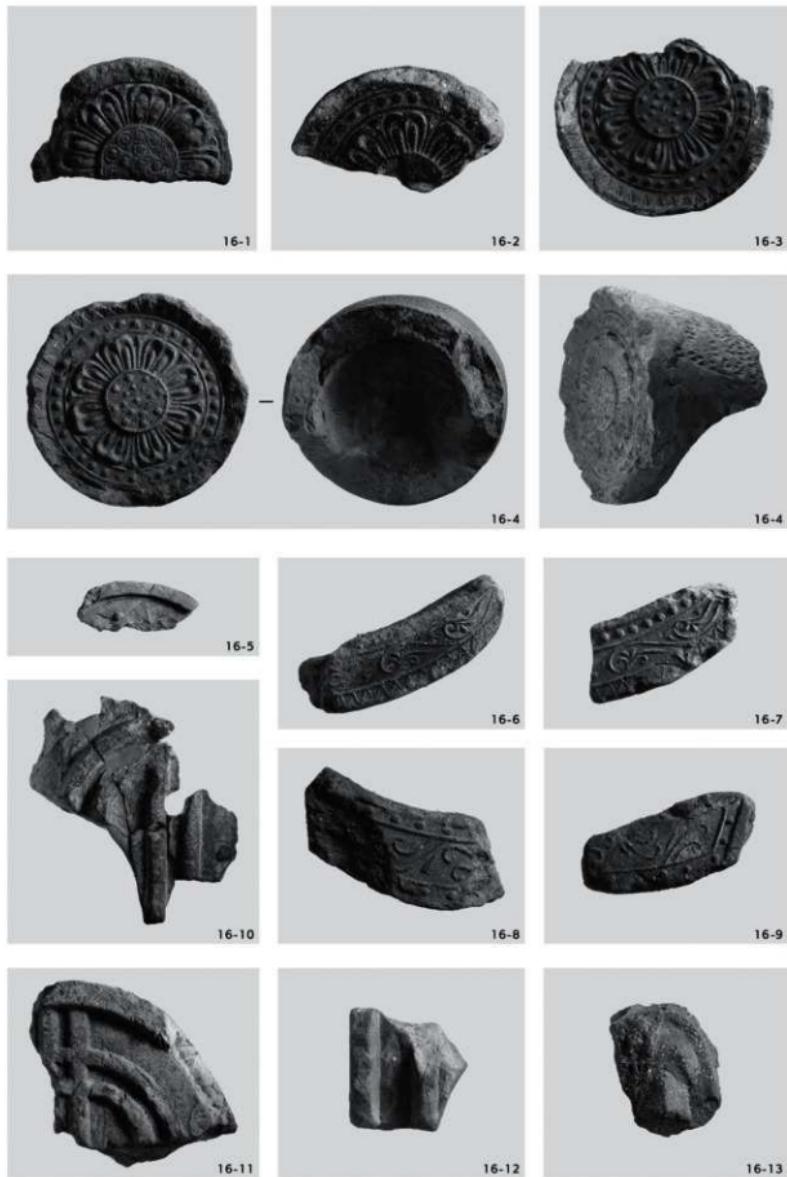


重圏文系鬼瓦出土状況(5層)



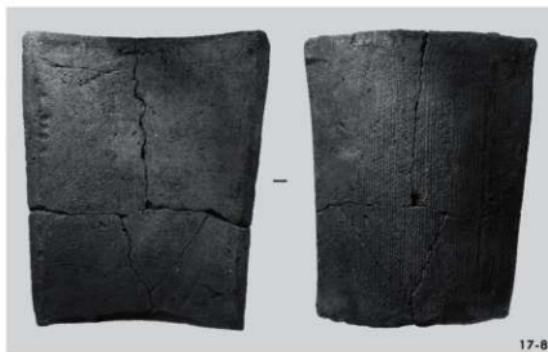
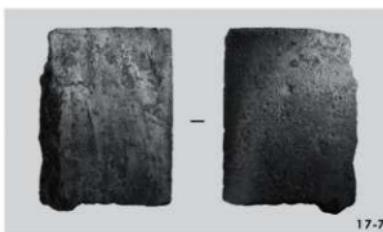
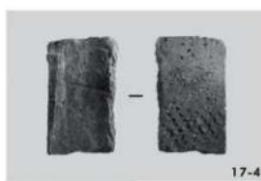
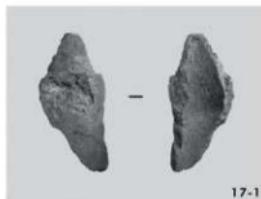
図版6





*番号は図番号と同じ

図版8



番号は図番号と同じ

報 告 書 抄 錄

本書の仕様

- 版型……A4判
- 頁数……64頁（表紙・見返しを除く）
- 印刷……オンデマンド印刷
- 用紙……表 紙 レザック四六判 175kg
写真図版 コート紙A判 70.5kg
本 文 書籍用紙A判 46.5kg
- 製本……無線綴
- 編集ソフト……Illustrator CC2019

伝吉田寺跡

府中市埋蔵文化財調査報告 第29冊

発行日 平成31(2019)年3月31日

編集・発行 府中市教育委員会

〒726-0003 広島県府中市元町1番地5

TEL 0847-43-7180

印 刷 有限会社コトブキ印刷